近代日本における国民高等学校運動の系譜（七）
——興農学園とその指導者たち——

宇　野　　　豪

（受付　2002年４月３日）

は　じ　め　に

これまで６回にわたり，わが国近代のある時期すなわち日露戦争後の1907（明治40）年頃から注目され始めたデンマーク国民高等学校運動が，如何なる経過を辿ってわが国内に影響を及ぼし，やがてそれをモデルとして運動化され，さらには極めて日本的な運動として展開されるに至ったのか，就中その指導的役割を果たした人物に焦点をおいて系譜的に考察してきたのである。しかし，当時のわが国内における国民高等学校運動は，この一連の系譜を主軸とするものだけではなかった。なるほどこれまでの考察の最後に到達した加藤完治を中心とする，いわゆる日本国民高等学校運動は，あたかも日本の国民高等学校運動の全てであるかの如き勢で展開されていったが，にもかかわらず，それとは異なった別の系列の国民高等学校とその運動が，わが国内になかったわけではない。

1934（昭和９）年10月財団法人協調会の調査報告『農村に於ける塾風教育』によれば，当時「丁抹国民高等学校の根本精神に発するもの」として「加藤完治氏を中心とする国民高等学校」「杉山元治郎氏等の影響強き——農民福音学校」及び「岡本利吉氏を中心とする農村青年共働学校」[1] その他があり，それらは「一は古神道，一はキリスト教，一は独自の宗教を基調」とし，相互に独特の特色を発揮して運動を展開しつつあることが示唆されている。この国民高等学校運動の分類乃至総括の適否，その根拠の真偽を問

1）　協調会『農村に於ける塾風教育』昭和九年，「緒言」４頁。

うことは現在必ずしも容易ではないが，それはさて置くとして，少なくとも当時のわが国内に多様な国民高等学校及びその運動が存在していたことが推測されるのである。

その一つがここで取り上げようとする興農学園（久連国民高等学園）である。前掲の『農村に於ける塾風教育』でも，この学園は「丁抹国民高等学校に範を取れるものとして」，「見落すべからざる」ものであると注目されている。しかし当時なお新参者であり，したがって「未だ之に倣ふものを見ざる為め」，単に「其他の特色ある教育機関」の一つとして紹介されるに留まっているのである[2)]。たしかに，この興農学園は当時としては不便な伊豆の片田舎に立地した小さな規模の学塾であった。しかしこの学園は，時流の風潮や政治的潮流から独立したキリスト教精神を基礎としつつ，デンマーク国民高等学校に範をとる，独特の理想に立脚した農民教育の学校として呱々の声を挙げたのであった。それはかの内村鑑三，新渡戸稲造など多くの協力者たちに支えられて設立された。にもかかわらず当時のわが国情はこの学校の可能性を育てるどろか，その展開を抑圧し遂には閉塞させてしまったのである。このような悲運の国民高等学校とその運動の経過を，その中心的指導者の系譜をたどり考察を進めていきたい。

緒論――興農学園の発足とその経緯

この学園は1929（昭和４）年６月13日，静岡県田方郡西浦村久連（現沼津市）に開校した。この学園の創設はすでに故人となっていた農学者渡瀬寅次郎（1859～1926）の遺志に基づいて行われた。その遺志とは，要するに「範を丁抹の国民高等学校にとり，基督教を基礎とせる精神教育，及び実際に則したる農業教育を日本農民に施さんとする」学校を設立すること[3)]であった。この故人の遺志の実現は，遺族は勿論多くの共感者の献身的支援によって達成された。とりわけその中心となったのは内村鑑三をはじめ故

2)　同，４～５頁。

3)　渡瀬昌勝編『渡瀬寅次郎伝』昭和九年，44頁。

人の札幌農学校時代からの盟友たちであった。

〔学園設立の準備〕

後年出版された『渡瀬寅次郎伝』によれば，その準備のための最初の協議は故人没後約半年を経た1927（昭和２）年４月に行われた。この会合に出席したのは遺族並びに親族のほか故人の友人内村鑑三，植村澄三郎[4]，伊藤一隆の３名であった。この３名のうち内村と伊藤は言うまでもなく札幌の盟友である。因に，遺族，親族からは故人の妻香芽子，実弟渡瀬庄三郎，長女花子の夫小坂順三，次男田中次郎の４名であった。この協議でほぼ次のような決議がなされたという[5]。

1．創立委員は上記出席者全員の外に下の４氏を加える。
　佐藤昌介，新渡戸稲造，宮部金吾，清水由松[6]
2．学校は基督教を基礎とし，農業教育を行うこと。
3．学校長の選任は内村鑑三氏に委嘱し，伊藤，小坂両氏がこれを補佐すること。
4．基本金として渡瀬家より金10萬円を支出すること。
5．差し当たり農閑期を利用して数ヶ月間の講習会の如きものを開き，主として精神教育を行い，又，農業教育及び実習をも併せ行う。なるべく簡便なる方法により，規模は小なりとも速やかに事業に

4）　植村澄三郎は1862（文久２）年山梨県甲府に生まれ，後上京して北海道開拓使東京出張所に勤務。その後大蔵，農商務，逓信等の各省に勤務したが，1889（明治22）年官を辞し，北海道炭鉱，札幌麦酒その他の会社役員として活躍した。植村は農商務省勤務の頃，北海道開拓使廃止によって東京の同省北海道事業管理局に転任してきた寅次郎と親交をもつようになった。両人の信頼関係については『寅次郎伝』において植村から詳しく語られている。（同書のほか日本図書センター版『大正人名辞典』等参照）

5）　『寅次郎伝』45～46頁。

6）　佐藤は故寅次郎とともに札幌農学校第一期生，新渡戸と宮部は内村鑑三とともに二期生。清水由松はかなり離れた後輩であるが，明治21年に札幌を卒業し茨城県尋常師範学校教諭として渡瀬校長の下で勤務，また後年渡瀬の後を承けて麻布中学校教頭に就任するなど，清水にとって渡瀬は深く信頼し敬愛する先輩であった。（『札幌農学校第五年報』，『寅次郎伝』参照）

着手すること。

6．校名は「興農学園」とすること。[7]

この決議に基づいて内村は，当時わが国における著名なデンマーク通であり，同国の国民高等学校及び農民教育研究者として知られていた平林廣人[8]に校長就任を依頼した。そして同年11月にその委嘱が決定。次いで12月に九州大学農学部助手大谷英一氏も指導者として参画することになった。また学園の敷地に関しては，故人が経営していた興農園の一農場の所在地である静岡県田方郡久連[9]を最適の地として決定した。

〔創立委員会〕

以上の諸準備を整えて，翌1928(昭和３)年10月10日，創立委員会が開かれたのである。さきの『伝』によると，出席者は内村鑑三，大島正健，伊藤一隆，新渡戸稲造，植村澄三郎，平林廣人，渡瀬香芽子，小坂順三，田中次郎，渡瀬庄三郎の10名であった。この委員会は「さし当たり久連村落にある空家を借り入れ，これを修築して，十人の生徒を収容し，可及的速かに開校の運びとなすこと」[10]を決めた。こうしてこの年の12月には７名の生徒が入学したのである。しかし開校式が正式に行われたのは翌年６月で

---

7) 「興農学園」の名称を提案したのは寅次郎の親友植村澄三郎であったことが，この会合に同席していた田中次郎によって語られている。(『伝』，269頁)

8) 岩渕文人編著『祖父・平林廣人』によれば，平林はかつて銀座教会の今井三郎牧師の紹介で内村鑑三と会い，デンマークの国民高等学校のような学校が日本にも欲しいと語ったことがあったという。(『祖父・平林広人』113頁)

9) 故人の次男田中次郎氏によれば，久連には故人が経営していた東京興農園の農場約10町歩があり，その大半は柑橘園であったが，同時に園芸作物等の育種場にも用いられ，故人は殊の外この土地を愛好し，可能な限り毎月一回は訪れて自ら移植，採種，播種等に携わっていたという。故人にとってそのような縁があるのみでなく，風光絶佳であるのみならず，農場が施設建設用地としても，また経営資金確保の面でも有効である等の判断のもとに，現地を視察した内村や平林等の創立委員はこの土地が学園設立の最適の地であると認めたという。(『伝』270～271頁)

10) 『伝』47頁。

あった。それは渡瀬家の寄付による寄宿舎及び体操場の落成を待ったからであった。因に，その寄宿舎の収容可能数は25人であった。

〔開校式〕

さきに記したように，興農学園の開校式は1929年６月13日いとも盛大に行われたのである。おそらくこの辺鄙の地ににおける小さな一学塾のこの開校式は異例のことであったにちがいない。故人の遺志に賛同し，学園創立の準備を進めてきた中心的指導者の内村が出席できなかったのは病気のためと思われるが，新渡戸，大島両博士が出席し，しかも新渡戸博士は一場の講演を試み，郡長や村長その他来賓の祝辞が述べられたのである。地元の後援もさることながら，故人をめぐる札幌農学校の盟友たちの深い絆と大きな期待，そして支援の熱意が強く感じられるのである。こうして故人渡瀬寅次郎の遺志が実現されたのである。いうまでもなくその最初の園長は平林廣人であった。

1.　始祖・渡瀬寅次郎

興農学園は渡瀬寅次郎なる人物の遺志に基づいて創設されたものであった。その意味においてこの人は興農学園の歴史的，思想的ルーツであり，始祖である。そこで我々は，まずその始祖渡瀬寅次郎の生い立ちと生きざま，そして彼の思想を問うことから考察を始めたいと思う。なぜなら，その『遺志』は彼の生涯の結晶であり，学園創設の根源となったものであり，その真実の意味をより深く理解するためには，そのような考察を経ることが必要不可欠であると考えるからである。

(一) 幕末の激動とともに始まった生涯――その前半生

〔生い立ち〕

『伝』によれば，寅次郎は1859(安政６)年６月，幕府の下級武士渡瀬源四郎の七男として江戸牛込仲町に生れた。５歳のとき父は病没し，以後兄と弟とともに健気なる母・ゆう・によって育てられた。大政奉還が行われた

1867（慶應３）年一家は多くの旧幕臣らとともに駿遠の地に移転することとなった。その初めの住所は藤枝であったが，翌年秋またもや沼津に転住させられた。この再三の転居は一家にとってまことに不安な流転の旅であったにちがいない。その重なる苦労が災いしたせいか母・ゆう・もまた翌1869（明治２）年８月，数え年49歳にして３人の兄弟を残して永眠したのである。寅次郎はこのとき11歳，兄昌邦は18歳，そして弟孫三郎（のち庄三郎と改名）は８歳であった。この流転の境涯のなかにありながら，寅次郎は沼津に移住した1868（明治元）年から沼津城内の学校代戯館に入学し，漢書や洋算を学び始めた。それは本人の向学心もさることながら，恐らくは旗本武家に育った賢母・ゆう・の意志でもあったと思われる。この代戯館は後静岡藩小学校となり，さらに明治五年学制により，翌６年からは公立小学校・小学集成舎となるが，この年からこの小学校の上に変則科を設け，14歳以上の者により高級の英，漢，数，習字等の学科を教授することになった。寅次郎も明治６年からこの変則科に入学したが，彼は就中英語の学習に熱心であった。そしてさらにその翌年外人教師がきて英語を教えるようになると，彼の勉強振りはますます真剣さを増したという。彼がこのように英語の学習に熱心であったのは，「これから学問で身を立てようとする者は」「どうしても外国語に精通する必要がある」と彼が常に考えていたからであった，と『伝』の筆者は述べている。それは彼のその後の生き様のなかにも読み取れるのである。

しかし，彼が両親亡きあともひたすらに勉学に精進しえたのは兄昌邦夫妻の援助と協力に負う所が大きかったのである。それは彼が札幌農学校に入学した後までも続いたという。したがって彼にとつて兄夫妻は常に親に代わる懐かしい存在であった。

〔札幌農学校時代〕

寅次郎は1875（明治８）年４月東京英語学校に入学，翌明治９年７月卒業，そして北海道開拓使が創設しようとする札幌学校（後の札幌農学校）への

入学を志望，選ばれた11人[11]の官費生の一人として同校に入学した。この学校は言うまでもなく北海道開拓の若い指導員の養成を目的として専門的な農学を中心とする教育を行おうとする学校であり，生徒は卒業後開拓使員として「五ヶ年間奉務」することか義務づけられている[12]。当時東京英語学校の学生は開成学校（後の東京大学）に進学するのが常であったが，あえて北辺の地に開校する札幌学校を選んだのは何故であろうか。『伝』によれば，「何となく農学に自分の将来が見出せるやうな気がする」と考えて受験したと，彼が言ったようにも書かれているが，むしろ開拓使御用船玄武丸に乗せられ初めて小樽に入港したときのことを追想するなかで語った「内地に跼蹐する儕輩に先んじて遥か未開の地に志を伸ぶるのであるから愉快極りなかった」（同書14頁）という所に，17歳前後の彼らのより正直な心境が窺える。そしてそこにはすでに寅次郎の生涯を貫いたいわばフロンティヤー・スピリット（開拓者魂）の幼芽ともいうべき積極果敢な心意気が見られるのである。

札幌学校は1876（明治９）年８月米国より赴任したW. S. クラーク博士を教頭とし，札幌農学校として開校した。周知の如くクラークは僅か在任８か月にして去っていったが，その身をもって示したキリスト教の信仰教育と，「紳士であれ」（Be gentleman !!）を唯一の校則とする厳しい訓育とは，開拓使長官黒田をして驚嘆感服させたほどに，若い学徒に大きな感化を与えたのである。それは単に「少年よ，大志を抱け」（Boys, be ambitious!!）という言葉だけではなかった。クラークによって多くの教え子たちは「イエスを信ずる者」となった。寅次郎も例外ではなく，彼はこの年（1878）８月に米人宣教師M. C. ハリスによって洗礼を受けたのである。このキリ

11）寅次郎の他の10名は佐藤昌介，柳本通義，田内捨六，黒岩四方之進，内田　瀞，山田義容，大島正健，中島信之，出田晴太郎，玉置恭三郎であった。そのなかで17歳未満であったのは寅次郎一人であった。（札幌学校「東京にて募集の新生徒着校の旨上申」，『北大百年史・札幌農学校史料（一）』1981年４月発行，223頁。

12）「本校設立ノ要旨」『札幌農学黌第一年報』明治十一年十一月刊行・開拓使（復刻版）69頁。

スト教とともにクラークの農業・農学教育の根底にあったものは「独立自営の訓練」であった。後年彼が創立した東京興農園の事業はこのときの訓練に負うところが大きかったという。（『伝』19頁）

札幌農学校第一期生13名は1880（明治13）年７月10日，４年間の学業を終え，本邦初の農学士の学位を得て卒業した。寅次郎はこのとき満21歳を迎えたばかりであった。因に，この卒業直前に同校教頭心得ペンハルローから上司に提出された『一期生各人の適性に付意見』によると，寅次郎に関し「渡瀬氏ハ一二年果樹栽培ノ事ヲ実地ニ従事セシメハ自ラ之ヲ監督スルニ至ラン」という記述が見出だされるのである[13]。

彼は後に東京興農園事業の一環として札幌に果樹園を開き林檎や西洋梨その他の苗木の栽培を始め，さらにその数年後，静岡県田方郡の久連に山林を購入開墾して柑橘栽培を中心とする農場を経営し，この地方の農民たちの柑橘栽培への指導に貢献（『伝』）したが，それは恰もさきのペンハルローの寅次郎評価によって予言されていたかのように思われ，興味深いものがある。

実に，寅次郎にとって札幌農学校時代における学生生活と教育感化，とりわけキリスト教精神を基礎としつつ，同時に，農業の実際的技能を重んじた教育は，その生涯を支え導く指針となり，骨肉となっていたのである。なお，その学生生活において看過し得ないのは深い交友の絆である。その絆の根源を問うことはさておくとして，それが彼の生涯，否死後にまで及び，すでに見てきたように興農学園の設立をも可能にした程に深くかつ強かったことは驚嘆するほかはない。

〔奉務に始まった在官時代〕

札幌農学校を卒業した寅次郎は「奉務」の規定に基づき同月北海道開拓使御用係を拝命，民事局勧業課に配され，一青年技師として北海道の農業振興に立ち向かうことになった。こうして彼のフロンティア精神は活動の

13）　前掲『北大百年史・札幌農学校史料（一）』494頁。

場を与えられ，積極進取，ほとんど休むことを知らなかった活動の生涯がスタートしたのである。

着任の翌々月十勝地方に始まり急速に諸地域に広がった飛蝗の大発生に対し，彼が提案した駆除方法と4年にわたる駆除指導は，見事にその功を奏した。また彼は，着任の翌年，北海道勧農協会の設立を提唱し，まず札幌官民の賛同のもとに創設に成功した。これが後の北海道農会の前身となったという。(『伝』)

1882(明治15)年開拓使が廃止され，寅次郎の身分は農商務省北海道事業管理局の札幌県御用係となったが，任務は変わらなかった。そして1884(明治17)年7月同御用係を依願退官し，札幌を去ることとなったのである。因に，その前年埼玉県の士族相田新助の娘香芽子と結婚した。

〔最初の外遊〕

札幌県御用係を退官した渡瀬は同年9月農商務省御用係を命じられ，北海道事業管理局事務取扱となった。この年12月，英国ロンドンで開催される予定の万国発明品博覧会の事務官長として渡英する上司安田定則局長に随行することを命じられ，翌年1月に博覧会事務官補並びに農商務省博覧会係事務取扱という任務が与えられた。渡英したのは3月であったが，その直前に文部省から同省御用係兼務として英国農学校に関する調査をすることが委嘱された。『伝』によれば，この博覧会において彼は得意とする英語を駆使して活躍しその任務を見事に果たし，功労賞を授与された。なお，この博覧会終了後，文部省委嘱による英国農学校の視察も果たした彼は欧州各国を巡り農事に関する視察をし，米国を経て翌年4月に帰国したが，この視察において日本と欧米の農業とを比較し「種苗及び農具供給者の知識及び実力の懸隔が余りにも甚だしいこと」(同書・25頁) を痛感したという。後年官を辞して間もなく彼が創めた「東京興農園」の事業はすでにこの視察に胚胎していたのである。

〔教育界への転身〕

外遊を終えて帰国した1886(明治19)年8月，寅次郎は茨城県立水戸中学

校長兼一等教諭に就任した。27歳の若さである。これはさきの万博の後茨城県知事となったかつての上司安田安則から懇望され，その知遇に応じたことによる。初めて教育界に身を投じた彼はここでも特有の新機軸を打ち出している。英語を重んじ米人教師を招いて正則英語の教授に当たらせた。同時に彼は体育を重視して，当時としては珍しい野球や陸上競技に力を注いだのである。『伝』によれば，体育としての陸上競技は札幌農学校におけるクラーク博士によって始められたもので，渡瀬の体育方針はそれを継承したものではないかという。英語教育の重視もおそらく札幌農学校における彼の体験に負うところが大きかったと思われる。

1888（明治21）年５月彼は茨城県尋常師範学校長に任じられ，同時に県学務課長を兼務することとなった。当時は恰も初代文相森有禮により彼の国家主義的立場から教育制度の改革に着手されていた時期であった。尋常師範学校は森文相によって新しく制定された「師範学校令」（1886）おいて各府県に一校を設置することを義務づけたものであり，国民教育において果たすその役割に対してはとくに大きな期待が寄せられていたのである[14)]。30歳に満たない彼がその校長に選ばれたことは実に希有の大抜擢であり，彼自身もまた一入堅い決意をもって任に着いたことであろう。なお県学務課長の兼務は「師範学校令」の規定によるものである。

〔官学からの訣別〕

師範学校長に就任した渡瀬は，その年の秋修学旅行中の生徒の風紀問題に関して不良生徒を退校，引率教員を免職するという厳しい処分を行った。この処分は予てから若輩渡瀬の校長就任を快しとしなかった教員の煽動により校の内外に波紋を広げることとなった。その詳細は『伝』の記述による他はないが，この経緯のなかでかつての上司であり，現に任命権者であ

14)　同校の創立は1874（明治７）年で，校長は渡瀬をもって４代目，この当時の生徒定員は140名であった。（日本教育史基本文献・史料叢書６『全国学校沿革史』（復刻版）大空社書店，1991年。黒田・土館編『明治学校沿革史』有明書房，平成元年刊。

る安田県知事も県会の政治的勢力に屈し，遂に渡瀬校長に処分撤回を要求するに至ったとき，渡瀬は同志であり部下でもあった，そして札幌農学校の後輩でもあった清水由松等（他に2名）とともに決然と辞表を提出したのであった。その後再三安田知事その他から翻意を促されたが決意を変えることはなかった。そして1889(明治22)年6月依願免官の辞令を受け取った。彼はその後も私学の教壇に立ち，また校長をも務めたことはあったが，しかし，このとき以後「官学には絶対近づかなかった」。それは「官学は政治に汚濁されるものと信じた彼は，これに職を奉ずることを屑しとしなかった」（同書・34頁）からである。

（二）日本農業振興のために――後半生

自ら不当な権力の介入に抗して官学を去り自由の身となった渡瀬は，一時期，東洋英和学校で教鞭を執り，次いで麻布中学校教頭を勤め，のち東京中学院長を勤めるなど教育界に関わるが，他方，赤坂区会議員（1892～1917）や東京市会議員（1899～1905）に選ばれ東京市政にも関与している。しかし，やはり彼の本領は農業乃至農界における活動とその貢献にあったと見られるのである。

〔大日本農会における貢献〕

茨城県立尋常師範学校長を辞した寅次郎はその年の11月大日本農会の幹事に特選された[15]。それはいかにも唐突にみえるが彼は開拓使御用掛として北海道に奉務していたときから同農会の会員であったのである。彼が加入したのは同農会が発足した1881(明治14)年4月から数ヶ月後の8月であったから[16]，まさに彼は大日本農会とともに年を重ねていたのである。したがって農学士渡瀬寅次郎がこのとき特選幹事に選ばれたとしても不思議は

15) 前任の特撰幹事高畠千畝の辞任によって農学士渡瀬寅次郎がその後任として会頭より特撰されたのである。『大日本農会報告』第百壱号，明治22年12月。

16) 渡瀬は明治14年8月に「特別会員」として加入したのてある。同報告第三号，明治14年9月。

ない。彼はその後同会常置議員（のち常議員と改称）となり，さらに1916(大正５)年同会が社団法人となるやその理事に選任され，1924(大正13)年春辞任するまで，役員として重要な役割を果たしたのである。

彼はまた，さきの特選幹事就任とともに同会の農芸委員を委嘱されている。同会『規則』によれば「農芸委員は学術若くは実業に熟練せる者」[17] を会頭が選ぶことになっている。要するに農学・農業の専門家としての知見や経験をもって直接的に農界に貢献することが期待されている人達である。渡瀬はこの委員を長期にわたって勤め，会員からの質問に答えたり，地方の集会における講演を依頼されたり，さらに中央での大会で講演を行うなど，多忙な任務に従事したのである。しかも彼は米国等の海外農業の視察を通じて知見を養うことを忘れなかった。『寅次郎伝』によれば「役員として会務に尽す傍ら，或ひは講師として各地の招聘に応じて出張講話し，或ひは欧米の農業関係文献の重要記事を訳述して農会報の資料供給に努めるなど，当時僅かに車代を弁ずる程度に過ぎなかった報酬に対してその献身的奉仕は農会関係者を感激せしむるものがあった」[18] という。

なお大日本農会における渡瀬の貢献の一つとして，同農会付属東京農学校さらに東京高等農学校の育成におけるそれを忘れてはならない。彼はすでに同会に委譲される前から東京農学校の評議員に委嘱されていたが，同会への移管に際してはその調査並びに処理のための委員に選ばれ，移管後は付属東京農学校の商議員に委嘱され，さらに同会の経営の下で高等農学校となり，さらに東京農業大学と発展し，その名称を変えていったが，1925(大正14)年同会の経営を離れて財団法人東京農業大学として独立するまで，彼は商議員として在職し，時には教務委員をも嘱託され，また長期にわたり科外講師として教壇にも立ったのである。(『寅次郎伝』，『東京農業大学七十年史』ほか参照)

17)　同報告第九拾四号，明治22年５月。
18)　『渡瀬寅次郎伝』36頁。

〔東京興農園の創設と経営〕

寅次郎の日本農業振興の意欲は単に大日本農会の役員及び農芸委員として奉仕するだけでは十分に満たされず，隔靴掻痒の思いであったにちがいない。かくして彼は1892(明治25)年10月赤坂溜池に種苗販売の店「東京興農園」を創設した。それはかつて彼が欧米農業を視察し，さらに農会役員として各地方の質問に応じたり実地視察を行った経験から，我が国農業の振興にとって種苗及び農具の改善が重要であることを痛感し，かねてから業界関係者にそれらの店の開設を勧めつつあったが実現を見ず，ついに自ら創業に踏み切ったのである。ただし，最初から種苗と農具を同時に扱うことは容易ではないので，「一種，二肥，三作り」という日本農業の古諺に従って，先ずは種苗の販売から出発することにしたという。(『伝』56頁)改良農具の販売を本格的に手懸けるようになったのはその7年後の1899(明治32)年10月であった。

東京興農園の事業は次第に拡張された。創業2年後には札幌支店が誕生し，その翌年には東京府駒沢村に試験場か開設され，さらにその翌年には札幌に東京興農園果樹園，次いで信州上田に東京興農園信濃蚕種部が設けられた。このような展開のなかで1903(明治36)年，静岡県田方郡西浦村久連に柑橘園とともに東京興農園採種場及び農場が設けられたのである。さらに寅次郎の雄図は内地のみに止まらなかった。1913(大正2)年，彼は自ら台湾に渡り，各地を踏査した上で台南州の官有地の払下げを申請し，種々の困難と闘いながら開発を進め，遂に興農園第三農場及び第四農場を設け，台南市に東京興農園台湾支店を開設したのである。この間にも勿論内地における拡張の手を弛めたわけではなく，埼玉県北足立郡神根村に広大な苗圃を開設するなど事業の拡張が進められたのである。

このように見てくると寅次郎はまさに企業意欲の虜に陥ったかの如くであるが，しかし農学者としての彼の興農すなわち日本農業・農界振興の初志を失うことはなかったのである。いうなれば興農園の事業は彼にとっては農学の実験であり実践であった。彼が農場とは別に試験場を設け，或い

は農場に試験場を付設したことはその証である。また彼は常に海外の農業事情を把握し，後れている日本の農業を欧米との競争に負けないものに改善進歩させたいという願いを抱いていた。彼は1900（明治33）年11月から翌年春にかけて米国・カナダの農事視察を行い，帰国直後大日本農会第20回大集会で「米国農事の観察一斑」[19] と題して講演を行っているが，そこでもそのことを強く訴えている。そのために彼は新しい種苗や改良農具や病害虫駆除剤を海外から輸入して販売したり，また海外の農業雑誌や農書を取り次いだのである。（『伝』）すなわちそれは単なる商業的目的からだけではなかったのである。彼はまた農民，農家そして農界の啓蒙・啓発に強い関心をもっていた勝れた指導者であった。それは『興農雑誌』の発行において最もよく表現されている。

〔『興農雑誌』の発行と農民の啓発〕

東京興農園から発行されたこの雑誌が企業宣伝のメディアであったことはいうまでもない。『寅次郎伝』によればこの雑誌はわが国「通信販売のパイオニア」（同書，75頁）といわれる程に先進的な工夫が凝らされた商業誌であったが，しかし他面において農民，農家そして地方農業界の啓発というねらいが編集の根底に置かれていたのである。この雑誌は興農園創立後2周年そして日清戦争開戦2か月後の1894（明治27）年10月に創刊された。その創刊号の社説「興農雑誌発行の主意」のなかで寅次郎は，本誌創刊の動機について

「……思ふに，我が国農事の改良すべきもの甚だ多し。吾人これを思ふこと久しく，曩にその根本たる種苗の改良を計らんとして，東京興農園を起し，広く内外の良種苗を蒐め，親しくこれを試験せるに，その中意外の好結果を得，（中略）全国各地農友諸君は熱心に吾人の挙を賛し，大家君子亦援助を垂れ，吾人の事業漸く緒に就かんとするに及びたるが，この間交通諮詢の機関として一雑誌を発行せよと勧めらるゝもの相次げり。

19）『大日本農会報』第二百三十六号，明治34年5月。

吾人は已にこの熱心なる諸君の慫慂あり，加之，今時勢亦更に吾人を刺衝する者あり，これ敢て吾人が自ら発奮せる所以なり。」（『伝』80～81頁）

と述べ，続いて本誌発行の方針を次のように示している。

「而して本誌は，農業上に於ける諸君の経験を聞き，間々又吾人の愚見を参へ，以て斯業の改進を計るの外，本誌は尚吾人の快樂幸福を増進せんがため，家庭に係ることを記さんとす。即ち各種蔬菜穀菽の調理法，家事經濟にかゝる諸事，閑夜爐を圍んで談ずるの際，子弟の訓誡となるべき事柄をも掲げ，又廣く諸般の質疑に応じ，啻に農事のみならず，子弟の教育，一家の興復，漫遊，留学，醫治衛生等のことに至るまで各その胸襟を披き，互に相助け，相教ふるの便を計り，今日艱嶮の世にありても，吾人の一團は互に一家となり，一族となり，世の淋しきを覺えず，友なきを悲しまず，假令世は一面の大海にして波濤天を衝くも，吾人は一個の方舟に坐し，愉快和樂の中にこの嶮を越えむとす。」（同書，81頁）

このような方針の下に編集された本誌の内容の構成や執筆者等について，また継続の過程における編集形態等の改変について，詳細に検討することは控えざるをえないが，寅次郎がいかに農民や農家そして地方農界の啓発に熱意を抱いていたか，それは彼がほとんど毎号のように巻頭に寄せた「社説」に最もよく現われている。さらに各号の「論説」或いは「論叢」さらに「農芸」欄等の執筆者として当時の農学界や農政界における諸大家（新渡戸稲造，田中芳男等々）や少壮気鋭の指導者（川上謙三郎，三村鐘三郎等々）が選ばれているところにも深い配慮が行き届いているように思われる。しかしながら『興農雑誌』は1907(明治40)年４月，14年にわたる151号をもって廃刊となったのである。（同書，第六章文化の先駆「興農雑誌」及び同書，餘録「對岳五十話」を参照）

（三）渡瀬寅次郎における人と思想

〔二つの主柱——キリスト教信仰と農学〕

すでに見てきたように，渡瀬寅次郎の生涯は幕末の激動のなかで始まった。そして彼は明治維新を経て明治－大正と67年４か月余の生涯を全うしたのである。彼の生きた時代ことにその前半期は我が国近代化の初期ともいうべき西欧文化移入による革新の時代であった。明治５年の『学制』に始まる教育の西欧化はその最たるものに他ならないが，寅次郎の人生にとって最も大きな影響を及ぼした出発点となったのは札幌農学校の教育，就中W.S.クラークの教育的感化であった。彼の人間的そして思想的原点ともいうべき基礎はそこで培われたのである。札幌農学校時代の学友大島正健が故人に捧げた弔いの詞はまさにその証言というに相応しい。

「渡瀬寅次郎君は，学生の時代にありては勤勉力行の人にして，如何なる学課と雖も曾てこれを軽視したるを見ず，よく師の命を奉じたり。又，札幌農学校第一期生として，親しくクラーク先生の薫陶を受け，独立独行の精神を深くその脳頭に印せられたるは，君の生涯に重大なる影響を与へたるものといふべく，後年成功の原因は遠くこゝに存するを忘るべからず。又，先生の誘導によりて基督教を信奉するに至り，明治十年八月，宣教師ハリス氏より洗礼を受け，その後その敬虔なる信念は，時に誘惑危険の岐路に立つも動かず，君をして清潔なる生活を営ましめたることも特にこれを記せざるを得ず」[20)]

ところでこのような札幌農学校，就中クラークの感化，いうなれば教育効果をもたらした背景には今一つ忘れられてはならない時代的要因があったのではなかろうか。

周知の如く，これまで一般にクラークの遺して去った言葉として「Boys, be ambitious !!」が語られ，恰も札農児の大志はそこから芽生えたかの如くに語られている。しかし果たしてそうだろうか。否と考える。すでに早く

20）『渡瀬寅次郎伝』190頁。

勉学の志を抱いて江戸で修学中であった彼そして彼等――その多くが士族の子弟であった――を遥か北海道に向かわしめたもの，それは彼等の冒険にも似た野心，いはばフロンティヤー・スピリットであった。それは当時向学の志に燃える青少年たちの多くが胸中に秘めていた時代的精神ではなかったか。だからこそクラークの教育・感化が功を奏したのではなかろうか。そのようなフロンティヤー・スピリットが札農教育によってさらに強化され，当時の多くの生徒の生涯に亘って持ち続けられた。渡瀬はまさにその代表的な一人であったのである。そしてそれが彼の活動の原動力となっていたのである。さらに彼は農学士として世に出た後先ずは官吏となり，次いで教師となり，さらに企業家となり，同時に大日本農会役員として，また東京市議会議員となるなど，極めて多彩な活動を展開した。それらのすべてが必ずしも自ら進んで選択したものではなかったであろう。にもかかわらずこの多面的な彼の生涯とくに世に出てから後の人生を一貫して，その方向を誤ることなく導いたものは何だろうか。思うに，その最も中心にあったもの，それはさきの旧友大島によって述べられているように，彼のキリスト教信仰であった。

しかし，札農教育が彼に与えたいま一つの大きな影響はいうまでもなく農業乃至農学の精神と知見であった。彼は農学士として世に出て，それ以後の生涯は――たとい一時期官吏や教育界に身を置いていたとしても――常に農界に関わり，さらに農業を自らの事業とするようになってからは，一層日本農業の振興に強い関心を持ち，その改善に務めたのであった。彼の札農以来の同志であり，彼の死後，遺族を助けてその「遺志」による学校即ち「興農学園」の実現に尽力した親友内村鑑三は，故人の死を悼んで次のように述べている。

「我等の旧き友の一人なる渡瀬寅次郎君は永き眠につかれました。悲しみに堪へません。君は明治の初年に我等と共にキリスト教を信じ，札幌独立基督教会の設立を賛けられ，その信仰を維持して今日に至り，終にその信仰を以て眠られました。君は官吏として，学校教員として，

実業家として，忠実にその職を尽されました。そして神は君の事業を恵み給ひて，これに成功を与へられました。君は農学士にふさはしい生涯を送られました。農を以て身を興し，農を以て国を益せられました。その点から見て君の生涯は間然するところがありません。我等はこの事につき君の為に神に感謝するものであります。」21)

〔農民啓発のフロンティヤー〕

すでに見てきたように，彼はかの東京興農園事業の一環として『興農雑誌』を発行した。それは単なる商業的目的のみに動機があったのではなく，むしろ「交通諮詢の機関」として「農業上に於ける諸君の経験を聞き，間々又吾人の愚見を参へ，以て斯業の改進を計るの外，本誌は尚吾人の快楽幸福を増進せんがため，家庭に係ることを記さんとす」るものであった。したがってその内容は農業そのものに関すること以外に，子弟教育や留学あるいは医治衛生等にも及んでいたのである。そこには，日本の農業の改善振興は種苗や農器具の改善のみでなく，農業従事者やその家族そして子弟の知識や生活態度をも改善させようとする彼の善意ある意図が強く感じられるのである。彼が努めて毎月執筆した「社説」に，そしてその編集の内容やその執筆者の選定における配慮によってもわかる。それはすでに述べてきたところである。そこでも指摘したがこの雑誌が我が国における「通信販売のパイオニア」であったとされているが，のみならず日本農民の啓発雑誌としてもおそらくパイオニアであったのではなかろうか。しかしこの雑誌の発行は14年間で廃刊の憂き目をみることとなった。それは渡瀬にとって不本意の結末であったに違いない。

『興農雑誌』による渡瀬の農民啓発は単なる情報活動の域を越えた啓発運動の実践でさえあったと思われる。その挫折はしかし，彼の悲願を新しい形で実現させることになったのである。しかし彼はすでに病魔に冒され自らその実現に携わることはできなかった。それは「遺志」として遺族，そ

21）　同書，192頁。

して同志に託す外なかったのである。同志内村鑑三は前掲の弔文のなかで次のように述べている。

「渡瀬君の霊魂は天にまします神の懐に帰りました。しかしながら君のこの世に於ける事業はまだ完成されません。神を信ずる者の事業は自分のための事業ではありません。国のため，人類のため，神のための事業であります。そして君はよくこの事を解してゐられたと承つてわります。丁抹流の基督教の基礎に立てる農学校を起したいとは，君の年来の志望であったと承ります。もし君がなほ十年生存せられたならば，この理想が君の直接の監督の下に実現したらうと思ひます。しかしながら，このことなくして逝かれしは，残念至極であります。しかしこの尊ぶべき理想は実現を見ずして已むべきではありません。その実行の責任は今や御遺族と我等友人の上に落ちてゐるのであります。」[22)]

そこに語られているように，彼は農村青年啓発の学校創設を宿願としつつ，自ら果たさぬままにこの世を去ったのである。それは彼が大日本農会の役員として，また東京興農園事業とりわけ『興農雑誌』を通じて，試行或いは実践してきた積年の体験を基礎としつつ，しかも「西洋の模範国」といわれたデンマークの農村青年教育機関（フォルクホイスコーレ）を範型とするものであった。それはいうなれば彼の長年にわたる啓発運動の悲願が見出だした新しい運動への転換を示唆するものでもあった。

このように見てくると，後年誕生する「興農学園」は単純に渡瀬寅次郎の「遺志」を起点とするものと考えるべきではない。それは渡瀬の永い農民啓発の体験いうなれば啓発運動の実践を背後に背負うものであった。したがってこの学園の創設は運動の継続的発展とも言うべきものである。そのような意味において渡瀬寅次郎は「興農学園の始祖」なのである。かの内村が弔文の最後に「私は旧札幌農学校の同志を代表し，こゝに渡瀬寅次

22）同書，193～194頁。

郎君の名を，グルントウイツヒの名が丁抹に残る如く，我が日本に残したいとの希望を述べます。これ亡き君に対し，君の遺族と友人とが尽すべき最大の義務であると信じます。」と訴えたのは，決して単なる感傷的な賛辞ではなかったであろう。

2.　興農学園初代校長・平林廣人

さきに見てきたように興農学園は渡瀬寅次郎の遺志に基づいて設立されたものである。渡瀬の没後半年にして開かれた遺族並びに故人の親友3名（内村，植村，及び伊藤）による協議において，故人の遺志が確認されるとともに，その事業はなるべく速やかに着手するという方針が決められた。また，その学園の名称は『興農学園』とすることになった。そしてこの学園の校長の人選は内村鑑三に一任することが決議されたのである。（「緒論」参照）この決議に従って内村が推薦し，やがて初代校長に就任したのがデンマーク研究家平林廣人であった。

（一）平林廣人とデンマーク国民高等学校研究

〔生い立ち〕

1987(昭和62)年に岩淵文人氏によって出版された『祖父・平林廣人』（創新社刊・私家版）によれば，平林廣人は1886(明治19)年4月，長野県東筑摩郡上川手村（現在の南安曇郡豊科町）において，父廣十郎，母せつの長男として生まれた。家は代々農家であったが，父親は村の世話役として道路や治山治水工事の世話に明け暮れ，祖父の薫陶を受けることが多かったという。村の高等小学校を卒業し1900(明治33)年，県立松本中学校に入学，日露戦争の最中1905年3月に卒業した。この松本中学在学の5年間は彼のその後の人生にとって重要な基礎を与えたようである。すなわち英語による西洋文化の吸収と，その研究への興味が開かれのである。また彼はこの在学中メソジスト教会の洗礼を受けキリスト教に入信している。そして卒業の翌年には日本メソジスト地方伝導士試験を受けて合格し，布教活動を

始めたという。西洋文化への傾倒の一面が窺われるであろう。

〔小学校教員時代〕

松本中学を卒業した平林青年はその4月，19歳にして母校上川手小学校の代用教員となった。彼は中学在学中から農村問題に関心をもっていたが，とくにこの頃から農業関係の西洋雑誌や洋書を購読することを始め，そこからデンマークの農業や国民高等学校の研究に興味をもつようになったという。

1908(明治41)年4月平林は東京の青山学院高等科に入学した。しかし7月には中退している。その間に知り合った同郷の女性中村いつと翌年早々結婚し，再び郷里長野県に帰り佐久郡野沢尋常小学校の訓導となった。彼は青山学院中退後，長野県教員検定試験に合格し（同年12月)，尋常小学校本科正教員の資格をとっていたのである。訓導としての彼は教育熱に燃えた勝れた教師であったが，他面農村問題への関心を一層強め多くの洋書を購読したという。その一つに英書『ルーラル・デンマーク・アンド・イッツ・レッスン』[23] 等があり，彼は一段と強くデンマークに興味をもっようになったようである。その後彼は1915(大正4)年東筑摩郡陸郷北尋常小学校の校長として転任，さらにその4年後の1919(大正8)年4月同郡中川尋常高等小学校校長に転じた。しかし，その2年後の3月をもって休職を命じられ，ついに11月退職することとなったのである。35歳の若さであった。この退職が果たして彼の落度によるものか，或いは何等かの中傷による当局の誤解等に起因するものか，その辺の事情はわからない。いずれにしても，それは彼にとって不本意であり，かつ遺憾であったことは想像に難くない。

なお彼の陸郷小学校長時代の活躍の一つとして特記しなければならないのは，おそらくわが国最初と思われる「夏期大学」の開設を提案し，それを「信濃木崎夏期大学」の実現に導いたことである。その経緯の詳細は『祖

---

23) Haggard, Sir Henry Rider; Rural Denmark and its Lessons. 1911.（日本語訳）内務省地方局訳『丁抹の田園生活』博文館，大正二年九月発行。

父・平林廣人』に俟つしかないが，たまたま中央において当時鉄道院総裁であった後藤新平を中心に進められつつあった通俗大学会の普及運動によって推進され，1917(大正６)年３月「財団法人信濃通俗大学会」が設置され，その夏８月１日から３週間にわたる夏期大学が実施されたのである。著者によれば，この木崎夏期大学は現在にまで受け継がれているという。平林は長野県の成人教育の歴史にとって忘れることのできない足跡を残しているのである。

〔少年団活動からデンマーク滞在へ〕

中川小学校を去った平林は，前述の夏期大学開設運動以来親しくなっていた当時の東京市長後藤新平の懇望を受けて，その年（大正10年）６月，東京市社会教育課市民自治訓練事務担当という部署に就任した。当時我が国内に漸く高まりを見せつつあったボーイスカウト運動のなかで所謂「少年団」の組織化が急速に進められていた。たまたま1922(大正11)年４月に，東京連合少年団と静岡少年団とが中心となり静岡と東京において第一回日本ジャンボリーが開かれたが，これを契機として少年団日本連盟が組織され，その総裁に後藤新平が選ばれた。そして同年11月，平林は後藤総裁の下で理事の一人として連盟の運営に関わることになった。

平林が理事となった翌々年1924(大正13)年８月コペンハーゲンにおいて第二回世界ジャンボリー並びに第三回ボーイスカウト国際会議か開かれたが，少年団日本連盟は経費節減のため，若い指導者の中から総員24名を選んで派遣することにした。彼はその一人に選ばれて参加することになったのである。ジャンボリー及び国際会議か終了し，帰国の途に着く直前に本部から「金を送るから少なくとも１年位しっかり教育視察をしてきてもよい」との連絡があり，彼はデンマークに残ることにしたのである。それは平林のみではなくイギリスとデンマークに計７名が残留することになったという。(岩淵著『平林廣人』による)

実は，平林は今回のジャンボリーに参加する直前に『農民の国・デンマ

ルク』[24]という著書の原稿を書き上げていたのである。それは郷土の先輩である教育学者沢柳政太郎（1865～1927）に勧められ，十数年の研究成果をまとめたものであった。それ故に，この度1年間にわたるデンマーク視察の機会が与えられたことは，彼にとってまさに天与の恵と思われたに違いない。こうして彼は帰国する一行をマルセイユまで見送り，再びコペンハーゲンに戻り，いよいよデンマークにおける勉学を始めることとなったのである。

〔二つの国民高等学校における在学体験〕

平林は10月からデンマーク語の学習を始めたが，その成果が十分に上がらないままに翌月3日からシェラン島北西部にあるウァレキル（Vallekilde）国民高等学校に入ったのである。彼は日本出発前に書き上げた『農民の国・デンマルク』で「デンマルクの光り国民高等学校」という一章を設け，「半世紀前，瀕死の状態にあったデンマルクをして，一躍世界の……模範国たらしめた」この国の教育，とりわけ世界に類を見ない独特の青年教育機関として発展した国民高等学校について，その成立の歴史や教育の特色をかなり詳しく紹介している。その実地検証がこのウァレキルで始められたのである。彼が少年団日本連盟に提出した報告[25]によると，その目的は「世界の農民を導くとまでいはれている，丁抹農村の実況を見，その若き農民の教育状況を調べたい」ということであった。そのため彼は「堂々たる青年農民」たちの中で一人デンマーク語が通じず「唖者の様に」なりながらも，この「朴訥な野趣が漲つてゐる」「此の世界無比なる青年訓練の道場とでもいふべき学校の真髄に触れて見たい」と考えたのである。

1925(大正14)年3月ウァレキル国民高等学校における5か月間の体験を終え，4月からユトランドのアスコフ国民高等学校に転じた。そして校長ヤコブ・アッペルの家庭に2か月滞在した。この国民高等学校は他の一般

24） 文化書房，大正十三年七月五日発行。

25） 「丁抹農民に伍して 海外派遣団残留中の報告に代へて」『少年団研究』第三巻第四号，大正十五年四月，少年団日本聯盟発行，20頁。

の国民高等学校を経た若者が学ぶ国民高等学校の最高学府であり，学生の年齢も20歳前後から43～4歳までと高く，彼は「三百二十名の男女学生に伍して，始めて丁抹農民の中堅者達の群に入つた様な感に打たれた」という。また，アスコフでは校長始め教員が極めて協力的であり，とりわけ彼のデンマーク語のレッスンのために7人の教員が交替で指導する特別の配慮をしてもらったこともあり，次第に学校内外の事情にも通じてきたのである。また，このアスコフの学校図書館は，彼によれば「デンマアク国民高等学校に関する研究資料の宝庫」であった。彼はここで自らの語学力の可能な限りで国民高等学校の成立・発展そして伝統，さらには現状等について認識を深めることに努めたのであった。その成果の一端を同年7月及び8月の『帝国教育』誌上に「デンマアク風の国民高等学校とは要するに何か」[26] として寄稿している。

アスコフでの4か月の課程を7月に終了した彼は農村行脚の旅に出た。それは国民高等学校なるものは，いわば「丁抹農村文化運動の参謀本部であって，その本活動は寧ろ農村の実生活にある」[27] と考えたからであった。

〔農村行脚とデンマーク文化の探求〕

彼はすでにアスコフ滞在中から，自ら探索の旅に出るのみならず，日本から訪れた視察者を案内したり，講演を依頼されて出かける等多面的に活動し，その都度様々な見聞を広めたのであった。彼はデンマーク滞在中，各地の修養団体や，学校に招かれて日本についての講演をしたことが130回を超えたと自ら報告している。アスコフ後の行脚では所謂デンマーク体操の本場オレロップ校を訪ね，その創始者ニールス・ブックと対談しかつその体操教育を目の当りにしたことは，彼にとって極めて感動的であり，彼の青少年教育に関する認識に大きな影響を及ぼしたようである。（岩淵『平林廣人』参照）その他平林の国民高等学校体験とその後の農村行脚によるデ

26)　『帝国教育』第五一五号，大正十四年七月（59～65頁及び第五一六号，同年八月（57～64頁）所載。

27)　前掲「丁抹農民に伍して」22頁。

ンマーク文化の探索は，彼に多くの感動と収穫をを与えた。それについては，帰国後彼が出版した『デンマルク』(文化書房，昭和三年一月）に詳しく報告されている。それは出発前に執筆された『農民の国・デンマルク』の内容をそのまま踏襲しているかに見える部分もあるが，注意深く読むうちにデンマーク１年有余の滞在によって修正と増補されている部分がかなり多いことが分かるのである。　夏から秋にかけての農村行脚を終えた彼はコペンハーゲンで約２ヶ月間，なおも王室図書館，大学，新聞社その他で資料収集や研究の整理をすることに費やし，12月中旬シベリヤ経由で帰国の途に着いたのである。

（二）興農学園の創設と校長平林廣人の貢献

〔校長推薦と内村鑑三〕

すでに見てきたように興農学園は渡瀬寅次郎の遺志が実現されたものであったが，その遺志の実現にあたり遺族とともに最も深く関わったのは，恐らく故人の友人内村鑑三であったと思われる。『渡瀬伝』によれば，「この寅次郎の遺図を聞いて，先ず異常な感激の下に双手をあげて，賛成したのは，札幌農学校時代からの盟友内村鑑三氏であった。氏は告別式席上，追悼の辞を述ぶるに当つて特にこの点を強調，礼賛し，更に自らも創立委員の一人たることを快諾して，これが創設に非常な尽力を捧げられた。」(『伝』45頁）という。そこに言われている「追悼の辞」についてはすでに見てきた通りである。内村は遺族以上に積極的に寅次郎の遺志実現に取り組んだのではないかと思われる。彼は1927(昭和２)年３月21日に茨城県宍戸町友部に，開校後間もない日本国民高等学校を訪ね，校内を視察し，依頼されて講演をしている[28]のであるが，それは前述の興農学園設立の決議

28)　内村の当日の日記には「農商務省高官某氏に伴われ，友人一団と共に茨城県友部に在る日本高等国民学校を訪れた。校長加藤寛治君の親切なる案内に依り校内隈なく視察するを得て大に教へらる丶所があつた。如何にして最も有効的に我国農家の子弟を教育せんヤと云ふのが問題である。(中略）自分にも若し年齢資金と ↗

がなされた最初の協議会（４月11日）以前であり，或いは彼は国民高等学校の実例，しかも当時その代表的存在として報道されていた同校の実態を確かめ，協議会に備えようとする意図があったからではなかろうか。しかし，彼が同校の立脚する古神道と渡瀬のキリスト教精神とは根本的に異なるものであることを知らなかったわけではない。むしろ如何に独自性を発揮するかが彼の念頭にあった課題であったに違いない。

このように興農学園設立に積極的であり，かつ自ら責任を担っていた内村は，協議会の委託を受けて学園長（校長）の推薦を行うに当たり，その適任者として平林廣人を選んだのである。内村が何故に平林を校長に推薦したのか，その理由は必ずしも明らかではない。しかし推測し得る理由の一つは，渡瀬が病床にあった４月（大正15年）平林が東京放送局で行った「丁抹の文化について」というラジオ放送を聴き共鳴したことが，興農学園が生まれるきっかけになったと，平林は前掲の『デンマルク』のなかで書いている[29)]。また，渡瀬の次男田中次郎も「ラヂオにより平林廣人氏の丁抹国民高等学校の話を聞き」，以前から洩らしていた「農民の教育」の学校について，「一層この計画の実現を期待し，「青山学院の今井牧師を招いて同氏の意見を聞いたりした」と書いている。（『渡瀬伝』参照）そこには多少のニュアンスの差はあれ，渡瀬の遺志に平林のラジオ放送が強い影響を与えたことは事実であろう。それは内村も十分承知していた筈である。第二の理由としては，当時デンマーク国民高等学校の紹介者として，またその留学体験者として平林を越える人はなかったであろうということが上げられる。そして第三に，平林はすでに今井牧師[30)]の紹介で内村とは面識があ

↘ が有るならば行つて見たき仕事である。（以下略）」と記されている。『内村鑑三全集35』岩波書店刊，166頁。

29)　平林廣人著『デンマルク』文化書房，昭和三年，122頁。

30)　『渡瀬寅次郎伝』，269頁。今井三郎（1885～1942）は日本メソジスト教会牧師であり，青山学院高等科の卒業後渡米，神学校大学院修了後1923（大正12）年帰国し，青山学院教会牧師となり，その翌年からは同学院高等学部教授に就任した。1936年には日本メソジスト教会伝導局長に任命された。（教文館『キリスト教歴史大事 ↗

り，しかも平林は「デンマークの国民高等学校の様な学校を日本にも欲しいと語った」という。(『平林廣人』参照）しかも平林は，日本メソジスト地方伝導士の資格をもったキリスト教徒でもあったのである。このように考えると，さきの協議会の委託を受けた内村鑑三が平林廣人を，まさに設立されようとする興農学園の校長適任者として推薦したことは，実に適切な判断であったと思われる。

〔校長就任と開校〕

平林廣人は内村鑑三から興農学園長就任の話があったとき最初は断わったという。理由は「経営の器でなく，開設するならば家族ぐるみの家庭学校として打ち込まなければ成果の無いこと，信州の家を継がねばならないこと，等」であったと，『平林廣人』の著者は書いている[31]。しかし内村のたっての説得に断わり切れず，「基礎作りとして四年間の期限を条件」として承諾したという。こうして1927(昭和２)年11月，正式に校長が委嘱されたのである。そして翌12月には図らずも後に園長を引き継ぐこととなった大谷英一も参画し，平林を創立委員長とし，渋谷の前田館を事務所として準備が進められたのである。設立地についても種々意見があったが，最終的には平林，大谷の下見により，内村及び渡瀬家の遺族が視察した上で，久連農場が選ばれることになった，と大谷は記している。(『渡瀬伝』243頁）云うまでも無く準備には学園の経営計画書の作成等も含まれていたのである。1928年９月敷地選定が終わったところで翌10月10日，いよいよ創立委員会が開催される運びとなったのである。

創立委員会の出席者及び決議事項等については，「緒論」においてほぼ見てきたのでここでは省略するが，そこで「空家を借り入れ云々」とあるが，

↘　典』・1988年刊参照）平林にとっては尊敬すべき友であり，先輩であったと見られる。なお，興農学園創設にあたっては内村，大島，新戸部等と共に役員に就任している。(『祖父・平林廣人』，117頁）

31）　前掲『平林廣人』，113頁。

すでに平林と大谷は9月に久連に来て空家を借り受け，手入れをして開校準備を完了していた，と大谷は語っている。(同書，244頁)

〔興農学園概要〕

開校準備において如何なる経営計画が立てられたのか，それは必ずしも明らかではないが，平林が自著『デンマルク』(昭和三年刊）に載せている「興農学園概要」なるものはは，恐らくそれに相当するか，少なくともそれに近いものではないかと思われる。さらにこの「概要」は開校当初における学園の外部に対する宣伝・紹介及び生徒募集要項でもあったのではなかろうか。その内容の主要な幾つかの点を取り上げてみると，まず，「目的」は「基督教ノ信仰ニ基キ，丁抹ニ於テ行ハルヽ協同組合ノ範ニ則リ，日本ノ国情ニ妥当スル善良ナル農民タルノ教養訓練ヲ施スヲ以テ目的トス」と定めている。そこで，丁抹の協同組合を範とすると謳われ，国民高等学校を範とするという表現がとられていないのは何故なのか。その理由は不明であるが，しかし，後年当時の協力者大谷英一が伝えている所によると，平林がこの学園開設にあたり関係方面に差し出した11月20日付の挨拶状にも「丁抹の国民高等学校とその精神を一にする興農学園の設立経営を委ねられました」という文言を見出だすことができる[32]。とすれば，形はともかく範はやはり彼の国の国民高等学校にあったのである。次に，「生徒」については「一般地方青年男女ニシテ年齢十八ヲ超エ，農民生活ヲ営マントスルモノハ学歴ノ如何ヲ問ハス入学スルコトヲ得」としているが，「但シ少クトモ高等小学校卒業以上ノ学力アルコトヲ要ス」という制限を加えている。また「期間」に関しては「在学期間ヲ一ケ年トシ四月及ヒ九月ノ初メニ全生徒ノ半数ツヽヲ更新入学セシム」と定めている。

教育形態に関しては「全日教育」とし，「生徒ハスベテ在学中学園内ニ在リテ，昼夜ノ差別ナク生活ノ一切を自律的訓練ニアテ通学スルコトヲ許サス」と規定している。ただし，聴講生として一部の通学生の入学を許可す

32)　大谷英一「興農学園に起居して」『渡瀬伝』，244頁。

ることもあるとしている。「教科」については，「一，聖書（基督教）」「二，文化史大意」「三，農学一般及農村社会学」「四，地理」「体操及ヒ唱歌」「生物学大意」「斉家」「其ノ他」とされている。それぞれについての説明は省略するが，そこに平林のデンマーク国民高等学校における体験が強く反映されていることは否めないであろう。そのことは「教授法」において「実務，講話，討論，臨場講義，及ヒ研究指導ニヨリテ教科書ニヨラザルコトヲ以テ要旨トス」としていること，「試験及ひ証書」に於いて「試験ハ一切之ヲ行ハス修了生ニ卒業証書ヲ授与セズ」としていることによっても明らかである。因に，「事務所」は「東京市外渋谷町上通り二丁目（旧称宮益坂）二十六番地　社団法人興農学園創立事務所」と記されている[33]。

(三) 初期興農学園教育――苦闘三年

〔地域農民との融合〕

平林廣人を園長（校長）とする興農学園は，1928（昭和３）年10月10日の創立委員会の決定にしたがって直ちに活動を開始した。しかし生徒募集は必ずしも順調には進まなかったようである。それは翌年６月に行われた開校式に際し参列した生徒が僅か７名であったことからも察しられるのである。そこで最初は村人に接触することに努め，「子供の会，青年男女の会，壮年老年の会などをやり，講演会，座談会，講習会，活動写真会等」を催したと当時の苦闘の様子を大谷は語っている[34]。このような活動は子供たちには共感を呼んだようであるが，青年や大人たちの間では，「渡瀬家の利益のため」とか「耶蘇教を広めて日本を米国に売るのだ」とかの風評さえ立ち，久連地方の人々の理解を得ることは極めて困難であったようである。

興農学園は最初農家の空家を借受け，それを平林，大谷の二人が手入れして学舎として出発したのである。そして翌年渡瀬家の出資で寮舎（収容可能数25名）が新築され，農家を改造した体操場が設けられ，６月に開校

33）平林『デンマルク』，123～128頁。
34）大谷英一「興農学園に起居して」『渡瀬伝』，245頁。

式が行われたのである。この年の秋に発行された某婦人雑誌の記事「デンマアク式の国民寮を実地に行つている　伊豆の興農学園を訪ふ」[35]にその三つの建物の写真が載せられている。その写真の一つは，いわば学園本部であるが，それはトタン屋根の二階建で「興農学園仮母屋」という小さな表札が出ていたと記者は書いている。そして学園のどの建物も隣接する農家との間に垣根が設けられていない。そして平林園長は「周囲の垣根をすつかり取り払つて，農村の中に没入してしまふのが，私達の目的です。御覧なさい，学校の裏庭が，お隣りの百姓家の縁先につゞいてゐます。」と，その記者に語ったという。この「仮母屋」から農家2～3軒隔てた向こうに新築の寮舎があり，さらに数軒隔てた海岸に体操場があったのである。「農民の中に融け込んで」こそ興農学園の存在理由があるということであろう。

〔興農学園教育――雑誌記者の報告をもとに〕

この雑誌記者が平林園長からの聴取と同園宿泊参観に基づいて伝えている興農学園教育の実践理念と現実の姿を要約してみよう。

（イ）日　課

午前		午後	
4：00	起床・体操場の掃除 体操（約1時間） 寮舎の清掃・朝食・礼拝	15：00 ⇩ 18：00	農場実習
6：30 ⇩ 8：30	〈学科講義〉聖書研究・文化史大意・自然研究・農学及び農村社会学・地理その他	19：00	夕食・礼拝・時事問題に関する意見交換等
9：00	〈農場実習〉柑橘の手入れ・豚の飼育他	20：00 21：00	体操（1時間）
11：15	昼食	⇩	日誌その他・就寝 (消灯は強要せず)
⇩	自由時間・間食		

（ロ）宗教教育

キリスト教主義の教養と訓育を行っているが，信仰は強要しな

35）『主婦之友』昭和4年11月号，122～129頁。

い。ときには近在の寺院の僧侶による法話を部落の人々と共に聴くこともある。

（ハ）男女共学

男女共学を方針としているが，この時点では女子生徒は入学していない。

（ニ）女子体操団の活躍

毎週水曜と土曜の夜８時から１時間婦人達の集団による体操が行われている。それは柔軟な準備体操の後，肋木，平行棒，跳躍台などを用いて行うかなり激しい体操である。それは，まさに平林がデンマークの国民高等学校の体験から発想し，「家の中に引込んで，前屈みの仕事に耽り勝ちな主婦」のため，そして「子孫の保健」のためにも「合理的な体操をやって頂きたい」という思いから始めたのである。

〈補記〉

記者の報告によると，当時の久連までの交通手段とその所要時間は，東海道線沼津駅下車，古宇行バス１時間余であった。また，当時の久連部落の戸数は79戸であった。ただし，『平林廣人』所収の「興農学園概要」には戸数90戸の純農村部落と記されている。

〔平林園長の辞任〕

1930（昭和５）年11月平林は学園を去った。大谷によれば「十一月伊豆に大地震あり，これを機として平林氏は学園を去り，静岡県嘱託として震災地を中心に活動を開始され，その後事一切を私が引受けることになった」[36]という。平林が突然に辞任した理由は何であったのか，それはさだかではない。彼は園長就任にあたり内村と取り交わした約束で４年を限度としていたことが『平林廣人』の著者によって述べられているが，果たして平林自身がどう考えていたのか，それは疑問に包まれたままである。共に学園の運営を支え創設期の苦労を分けあってきた大谷も，後年著した『日本村塾教育』（昭和十年刊）のなかで「Ｈ氏の生みの苦しみについては，私の申

36）大谷英一，同書，246頁。

し述べる限りでない」とし，大谷自身にとっても「苦難な棘の道であった」と当時の苦労を匂わせているが，「あまり個人的な問題にわたる」から「その物語り」は割愛すると云っている[37]。平林の園長辞任の理由は，種々臆測を巡らすことは可能であるが，依然として不明のままである。平林はこのとき44歳を過ぎていた。

いずれにしても，平林園長の突然の辞任は単に平林個人の挫折に留まるものではない。ようやく歩み始めた興農学園にとっても危機的な打撃であった。それは後継者大谷にとって，また経営に関わる役員とりわけ渡瀬一族にとって，予期し得なかった事態であり，乗り越えなければならない試練の始まりであった[38]。

ところで『祖父　平林廣人』には前述の平林退任について以下のような記述が見られる。すなわち「平林廣人は興農学園の成果が認められた為か，東京市当時の実績からか，講演の成果か，昭和七年七月二十七日より静岡県の農村指導振興課の経済更生指定村振興事務の嘱託になっている。

更に，この昭和七年十二月，興農学園の初期の段階が完成し，軌道に乗って来るまでと言う約束の四年が終わった為と，父親の希望も大きい為，興農学園の園長を辞して信州の故郷に帰ることになったのであった。」[39] というものである。これは伊豆大地震のあった昭和５年11月を契機に学園を去ったという大谷や渡瀬家の記述とは大きく異なるのである。今にして思えば，平林が自ら理由を明確にして興農学園を去らなかったこと，また協力者大谷からも「個人的な問題」として明言を避けられたことは，単に歴史的な

37)　大谷英一著『日本村塾教育』，昭和十年，50頁。

38)　ジャーナリストであり，教育評論家でもあった志垣寛は昭和初期に始まった農村郷土教育について論じたなかで国民高等学校の思潮に触れ，平林に関し「昭和の中葉東京市嘱託として隣組の指導に専念していた平林廣人もデンマークに遊んで帰来国民高等学校を伊豆の山村に設立したが永続せずに了った」（志垣『教育太平記 教育興亡五十年史』洋々社，昭和31年刊）と書いている。この当時，事情を知らない外部の人々には平林の進退と興農学園の存否は一つ事として見られていたのであろう。

39)　岩淵文人著『祖父　平林廣人』，125頁。

真実の解明の為のみならず，興農学園の発展の為にも，さらに日本における国民高等学校運動の発展の為にも，極めて残念なことであった。

〔その後の平林廣人〕

久連を去った平林が，何処でどのような活動を始めたのか，それは必ずしも明白ではない。さきの『平林廣人』によれば，昭和７年７月から静岡県の経済更生指定村振興事務の嘱託になっているが，それ以前から彼は講演や雑誌投稿によるデンマークやデンマーク体操の紹介を続けていたとも書かれている。

彼がメソジスト教会牧師の資格をもっていたことについてはすでに見てきたが，興農学園を去った翌年（昭和６年）夏頃から農村伝導委員として活動を始めようとしていた形跡がある。（同書）そしてかの満洲事変の翌年1933（昭和８）年７月メソジスト新京教会創設牧師として満洲（現中国東北区）に赴任し，２年間の伝導活動を行っている。

我が国内が次第に軍国的風潮が高まるなか，帰国した平林は昭和10年日本童話協会主催の「アンデルセン童話百周年記念会」の発起人及び実行委員として活躍，この頃からアンデルセンの紹介やその童話の翻訳を始め雑誌等に発表しているのである。

ところが彼は，この年の12月末要請されて再び東京市嘱託にもどり，選挙粛正事務，隣組育成指導等を担当。さらに戦時体制の下での隣組関連の指導業務に携わり，敗戦後1947（昭和22）年３月依願退任まで11年間在職したのである。すでに彼は還暦を過ぎていたのである。

公職から離れた彼は本格的に翻訳家生活に入り，アンデルセン童話の翻訳に取り組み，昭和22年以降24年までの間に「アンデルセン童話集」第一編から第四編までを出版しているのである。このような翻訳の間にも彼は，デンマーク紹介の講演に遠くまで出かけ，また「デンマーク資料集」を相次いで刊行しているのである。この発行には娘岩淵みちの協力があったというが，それにしても驚異的なエネルギーである。

彼はまた昭和20年代後半以後世界連邦会議や国際図書館協会の関係で北

欧に赴き，その度にデンマークに滞在し，研究資料の収集に努めている。ここで特に一言しておきたいのは，彼が北欧を歴訪して確信を得たことは，国民高等学校の主眼は「どこまでも一般教養の学校であって，職業学校ではない（中略）あくまでも，学校長の家族を挙げて醸し出される家庭的な雰囲気によって青年男女の人格を培う家塾でなければならないと言う事」（『平林廣人』172 頁）だった。かつて彼が突如興農学園を辞したのは，或いはこのような国民高等学校の主眼との矛盾に耐え切れなかったからかも知れない。

平林は1966(昭和41)年 4 月から東海大学の北欧文学講師となっている。そしてその翌年『アンデルセンの研究』を出版。しかしその間に妻・いつ・を亡くしている。

1972(昭和47)年 3 月末を以て東海大学を退職，5 月出生地長野県豊科町に向けて旅立ったのであった。このとき86歳であった。しかもなお翻訳著述の日々を続けたという。1986(昭和61)年 2 月21日，老衰のため99歳を以て逝去した。

3.　大　谷　英　一

――学園再興と村塾教育運動の展開――

（一）興農学園創設への参加

〔生い立ち〕

大谷英一は1905(明治38)年 6 月14日栃木県塩谷郡片岡村大槻（現矢板市大槻）の中農大谷家の長男として生まれた。彼自ら語るところによれば，長男でもある息子に是非農業をやらせたいという親の意志により県立宇都宮農学校に入った。しかし彼は家業を継ぐことはせず，官立宇都宮高等農林学校に進み1926(大正15)年 3 月卒業した。ここで彼は母校の教員になることを「予定」し，農業経済学の研究を志して九州大学に学び木村修三教授の助手となった。しかし，この頃から彼は，研究者への道よりも実践的教育者への道が自分に適していると考えるようになったという。

彼がキリスト教に関心をもつようになったのは宇都宮高農在学中の頃からであった。たまたま賀川豊彦の『死線を越えて』を読んで感動していた矢先，関東大震災が発生したが，そのとき大谷は「私も飛び出して行って，一カ月くらい学校を休んで，本所の松倉町で賀川先生のセツルメントに参加した」というのである。またその後，多分九州時代と思われるが，英語を習うことから宣教師と親しくなり，聖書に接するようになった。そして次第に人生の問題を考えるようになり，やがて信仰に目覚め，物の考え方が変わってきたと語っている[40]。

〔興農学園創設への参加〕

すでに本稿「緒論」及び平林廣人に関する所論において触れているように，大谷英一は創設準備期から興農学園に関わっている。すなわち平林が園長に就任することが決定したのは1927(昭和２)年11月であったが，その翌月12月に大谷は上京し，平林を助けて興農学園開設準備を始めたのである。

当時九州大学助手として研究に従事していた大谷が何の様な経緯によって興農学園創設に関与するようになったのか，詳しい事情は必ずしも明らかではない。『渡瀬寅次郎伝』によれば，次男田中次郎は「当時九州大学農学部助手として勤務中だった大谷英一氏がこの事業を伝え聞き，援助の意味に於て上京され，平林氏と共に創立事務に当つてをられた」[41]と書いている。しかし，大谷本人は同書の中で「木村修三教授，高須虎六教授，石黒農務局長（後に農林次官）等のおすすめにより，この事業に関与するに至り，云々」[42]と書いているのである。いずれにしても大谷が興農学園の創設に参加したのは，今日の所謂公募というようなものではなく，極めて自発的なものであり，まさにボランティア的な参加であった。彼は当時22歳の

40)　下記の諸資料による。①「大谷英一氏に聞く」『松前文庫』第二十一号，昭和55年４月発行。②「大谷英一」『郷土を築く人々』，自治新報社，1981。③『栃木県歴史人物事典』ほか。

41)　田中次郎「久連学園と父」『渡瀬寅次郎伝』，271頁。

42)　大谷英一「興農学園に起居して」『渡瀬伝』，243頁。

若さであった。しかも，キリスト教に目覚め，ますます信仰を深めつつあり，また農業教育の実践に自己の将来を見出だそうとしつつあったのである。彼にとって，そして興農学園にとっても，まことに幸いな出会いであったと言うべきであろう。

すでに見てきたように，興農学園創設の立地を渡瀬家の農場の一つ――故人寅次郎が晩年とりわけ親しみをもっていた農場――の所在地静岡県田方郡西浦村久連（現沼津市西浦町）とすることに決定したのは，大谷が上京して創設準備に参加した年の翌年1928（昭和3）年10月10日の創立委員会であった。直ちに平林と大谷の二人は現地に赴き農家の空き家を借受け学園開設の準備をしたのである。そして準備を整え生徒の受入れが可能となったのは11月半ばではなかったかと想像される[43]。

〔創設初期の苦難と模索的実践〕

この創設初期において二人が味わった苦労は，並々ならぬものがあった。彼は著書『日本村塾教育』（昭和10年）のなかでこの頃の体験を語っているが，村人たちから「邪教」として敬遠され，「悪魔」として罵られるなかで，キリスト教の精神を貫き，しかも村落共同体の一員として生きつつ興農学園教育に献身したのである。そのなかで二人は「真物の教育」は，「山の中に立籠つて居ては駄目だ。一つの部落，一つの村自体を学校とし，教育村とし，かかる環境の中に在つて，体験を貫きつゝ教育する事」[44]にこそあると考えるようになったのである。こうして彼等，否生徒をも含めて興農学園は「村の中にある村塾」として村に溶け込み，村の子どもや青年そして一般の人々の理解を深めかつ啓発活動を展開しながら，同時に，生徒に対する独自の学園教育の目的を達成すべく日々努力していたのであった。そ

43）上記「興農学園に起居して」のなかで，平林校長の農村家塾開設の挨拶状の抜粋が紹介されており，その日付が11月20日となっていること，また前記の「十二月中のプログラム」の最初の日曜講話会が第二回となっていること，などにより推測。ただし生徒が入園したのは12月頃からであったと田中次郎は前掲「久連学園と父」のなかで書いている。

44）大谷英一著『日本村塾教育』関谷書店，昭和十年九月（再版）56頁。

のような状況の一端を，大谷が記録として残している当時の計画表（下表）によって窺い知ることができるであろう。この計画とは別に学園独自の生徒に対する教育計画があったことは言うまでもない。

昭和三年十二月中のプログラム

日時	曜日	集　会	種別	題　目	講話者
2	日	第二回日曜講話会	一般	人の生涯	平　林
同	日	子供の会		午前九時——十時	大　谷
3	火	懇話会	男	村の話　其の一　村政	西島村長
5	水	同　上	女	同　　其の二　村政	同
6	木	青年の会	男	青年団の組織及活動	平　林
7	金	同　上	女	女子青年団の仕事	同
9	日	第三回日曜講話会	一般	幸福への道	同
同	日	子供の会			大　谷
11	火	懇話会	男	村の話　其の三　教育	高橋校長
12	水	同　上	女	同　　其の四	同
13	木	青年の会	男	青年団の組織と活動	平　林
14	金	同　上	女	女子青年団の仕事	同
16	日	第四回日曜講話会	一般	農村経済生活に就て	大　谷
同	日	子供の会			大　谷
18	火	懇話会	男	村の話　其の五　健康	橋本校医
19	水	同　上	女	同　　其の六　同	同
20	木	青年の会	男	青年の修養法	平　林
21	金	同　上	女	女子青年の修養法	平　林
22	日	第五回日曜講話会	一般	時のうつりかはり	同
同	日	子供の会			大　谷
26	水	クリスマス	一般	学園の暮祭	

（備考）原典は縦書き（大谷英一著『日本村塾教育』P. 70～71より）

（二）興農学園(校)長の継承と研修留学

〔校長就任〕

1930(昭和５)年11月平林校長の突然の辞任は学園関係者にとって思いがけない衝撃であったに違いない。しかもそれは伊豆地方の大震災と機を一にしていたのである。さらにそれは興農学園が財団法人としての寄付行為の申請を静岡県に提出（５月）していた矢先であった。この事態に対応して同年末，大谷英一が校長を引き受けることになったのである。渡瀬家の次男田中次郎の記述によれば，「昭和六年二月，第三回の終了式を行ふまで年々十五名位の生徒を教育してゐた」という状況にあった。いうなればまだ学園の存在は決して安定してはいなかったのである。そこで学園の教育は一時中止され，立て直しを図ることとなった。そして渡瀬家は学園再興のために，新任校長大谷を約２年間ドイツ及びデンマークに送り，国民高等学校を視察研修する機会を与えたのである。しかも，文部省にも理解を求め文部省嘱託という肩書を得ることができたのである。

〔留学――欧州国民高等学校視察〕

大谷は1931(昭和６)年４月に出発し，先ずドイツ次いでデンマークに滞在し，主としてそれらの国の国民高等学校を視察し，翌年８月に帰国した。晩年彼が語っているところによれば，たまたま満洲事変が勃発したことにより，急激に為替相場が不安定になり，在外生活が厳しくなったため，予定を早めて帰国したのであった。

彼が晩年記した『遺稿』(三男大谷光三氏提供）によれば，シベリヤ経由で先ずドイツに着き，ベルリン大学のドイツ語教授所において語学研修を受けている。その後，ポーランドとの国境近くにあった「ベーレ国民高等学校の冬期コース」に入学し，敗戦後のドイツ農村青年男女と生活をともにして半年間を過ごした。次いで，加藤完治氏の紹介により，工場労働者を中心とする「イーナ国民高等学校」においてカルベ博士の指導を受けることになった。その間にも彼は出来る限り，ドイツ東部を中心とする農民生活と農業の実態を調査し，生きた農民の生活を知るために大農，小農，大

工，左官など一般大衆の家庭を訪ね宿泊して，書物では学べない体験を通して生きた学問を身に着けることができたという。彼はドイツに「あと一，二年は学びつづけたい」思いはあったが，別れを告げてデンマークへ。

デンマークでは先ずコペンハーゲンに入り，市内を見学した後「ハスレフ国民高等学校の夏季部（女子）」に入学した。ここではとくに校長夫妻の温かい計らいを得て，デンマーク語の学習をしながら，「国民高等学校の本山アスコフ」，「ヘルシンガーの国際国民高等学校」さらに「ニルス・ブックの体操学校」その他数多くの高等学校を視察して国民高等学校の教育とは何かを理解することに努めたのであった。ただしさきに触れたような事情によって，帰国の時期を繰り上げることになったのは当人にとってまことに残念なことであった。帰国前にコペンハーゲンに戻り，グルントウィ関係の文献資料[45)]を漁り，グルントウィ教会の祈りに出席し，また農民解放の碑，人魚の像，そしてオーデンセのアンデルセンの像，さらに内村鑑三によって教えられたダルガスの森を訪ねた後，ドイツを経てイギリスに渡り，ロンドン港から帰国の途に着いたのである。（この項は主として大谷光三氏提供・大谷英一『遺稿』による）

〔留学の成果――自由国民教育の認識〕

1年余にわたる欧州滞在によって大谷が獲得した成果は何であったか。とりわけ国民高等学校及びその教育について彼はどのような認識を得たのであろうか。彼は帰国後興農学園の新校長として早急に学園の再発足を果たさなければならなかった。それについては後述するが，その再興の重責を背負うなかで欧州留学の体験を反省しつつ，逐次公けにしようと努力している。その一つ同学園出版部発行の大谷英一著『自由国民教育』の「序」において，大谷は「私は昭和二年以来，山の生活をはじめ，思索し，体験し，生きた教育の世界を辿つてゐる。山村の塾教育の体験をもつて，ドイツに丁抹に英国に生きた教育を探し求めた。そうして得たところのものは

45)　後年，久連国民高等学校研究資料第三輯『N. F. S. グルントウィ研究に関する文献』としてまとめ，出版している。（昭和14年10月発行）

疲労にすぎなかつた。」そ　てさらに「私は餘に自己と自己の郷土日本を忘れてゐた。私は識つた。日本の教育は日本の土から生れ出てたものでなくればならないと。」と記している。

そこでは，あたかも彼は留学の成果はなかったかのように言いながら，しかし「郷土日本を忘れていた」ことをこの欧州体験が気づかせてくれた，また「日本の教育は日本の土から生れ出てたもの」でなければならないことを知らされた，ということを告白しているのである。それは，単に西洋の教育文化を模倣することからは，真の青年否人間教育は生まれない，ということの反省乃至自己批判でもある。そしてさらに，彼は国民高等学校に関して「自由国民教育，それは国民高等学校教育を意味するに外ならない。」と，明快に言い切っている。この著を『自由国民教育』とした意図もまたそこにあったのである。こうして彼の欧州留学は決して「草臥れ儲け」に終わったわけではなかった。

（三）興農学園の再興

〔私塾・久連国民高等学校の発足〕

1932（昭和７）年８月に帰国した大谷は早速学園再興に取りかからなければならなかった。施設に関しては，食堂，校長住宅，実験室，当直室の新築，農場の整備などを行って再開に備えたが，同時に渡欧前からの課題であった財団法人組織の認可申請の問題があった。大谷帰国後，渡瀬一族とともに尽力して財団法人興農学園と，その経営する学校を独立させることで静岡県の認可を得ることができたのである。こうして学塾の名称は「久連国民高等学校」となったのである。これが認可されたのは翌昭和８年２月であった。この興農学園の組織変更は興農学園再興への出発点であったが，大谷にとってもまさに心機一転，覚悟を新たにしてこの課題に挑戦しなければならなくなったのである。彼はそのために新しい学園教育の理念や方針を再確認するとともに，具体的な教育実践の指針と計画を早急に確立する必要に迫られた。しかも彼は欧州留学中ドイツ及びデンマークの国

民高等学校の教育を自ら体験或いは視察し，知見を広めたのみならず，祖国日本の国民文化や教育についても反省と思索のための刺激を得ていたと思われる。それは自ずから平林とともに始めた興農学園創設期の実践を見直し，かつ改善或いは修正して新機軸を打ち出すことになったのである。

〔「自由国民教育」としての国民高等学校〕

大谷英一を学園長とする新しい久連国民高等学園（校）は1933（昭和８）年５月から夏期部生徒の受入れ活動を開始したのである。欧州留学を終えて帰国した大谷園長はどのような決意をもって臨もうとしたのであろうか。その決意表明が彼の処女作ともいうべき『自由国民教育・第一冊』であった。さき程それは「留学の成果」の発表であると言ったが，むしろ正確には，留学の成果を踏まえた決意表明であり，学園教育の指針発表というべきであろう。その内容は（一）日本の姿，（二）国民高等学校の真髄，（三）久連村塾について，の三章からなっている。同書の本文は僅かに36頁に過ぎない小冊子であり，またその論述は詩的，散文的な章があったり，部分的に談話調であったり，ときに箇条書形式であったり等，必ずしも論理的体系的な著作ではない。しかし，反面，そこには未完成ながら単なる外来的模倣的でない日本独自の国民高等学校を作ろうとする彼の姿勢と意欲が強く現れている。さらにそこには，彼が後に展開していく日本村塾教育運動としての国民高等学校運動の思想と理論化の萌芽がすでに顔を見せているのである。

『自由国民教育』において先ず彼が強調しているのは，西洋文化への心酔によって失われた「祖国日本」，すなわち「真の日本」をとり戻さなければならない，ということである。また彼は資本主義とともに社会主義を非難し，都市と都市文明の発展を悲しむ。それらは古い日本の文化や日本人の価値観を喪失させ，そして国民性を分裂させてしまったと嘆く。「大和心の日本，自然の日本，土の日本，農の日本，神の国日本」そのような日本こそ彼が求めている「祖国日本」である。それはまた民族文化，郷土，村落そして農の意義の強調にも繋がっているのである。「郷土なき都市文明を見

よ，土に立たざる，農に立たざるマンモンの王座に君臨する暴君を見よ。」[46] と言い，「古い日本は統一であり，新日本は分裂である。村落は統一であり，都会は分裂の姿である。」[47] とも言う。そこには復古主義にも通じるような祖国回帰の思想，農本主義，反都市文化観がある。これは欧州滞在中の経験と思索によってもたらされたものなのか，或いはそれ以前から彼の内部に培われていた信念乃至持論なのか，さらに満洲事変以降の政治的，思想的情勢の変化に対応するものなのか，その立論の根拠は明らかではない。

次に，第二章で彼は国民高等学校とは何かを明らかにしようとし，先ずデンマークの国民高等学校の歴史的・思想的原点ともいうべきグルントウィの国民高等学校思想を要約している。そこでは，第一に，国民高等学校教育の目的は「試験やパン」のためではなく，人格の自立と世界観の確立にある。それ故に，第二に，「活用しない知識の注入を排し」「生きた言葉」による教育を行う。そして第三に，国民高等学校はキリスト教を基礎とするが，しかし「第一に国民的であり，然る後キリスト教的」でなければならない。そこから教育内容の重点は「国語及び歴史」にあった。これを要するに，デンマーク国民高等学校の本質的性格は青年の「国民的な・人間的な・宗教的な人格完成」[48] にあったと論じている。然る後，今日における国民高等学校の人格陶冶の課題を提案し，五つの箇条に要約して簡潔に説明を加えている。（説明は省く）①国民高等学校の教育対象は男女青年である。②国民文化の中心点となること。③国民精神作興の道場である。④どこどこまでも，人格陶冶を眼目としていること。⑤国民生活鍛練の道場である。彼はこの章の最後に，「学校は，常に自発的に，民間に，国家の法的束縛のない自由な私立学校として創設され，経営され，国家はたゞ，其の目的遂行のため補助金を支出してゐるのであります。男女青年も亦，全く，自発的に，この私塾風の学校生活に入つて行きます。これが自由国民教育，

46)　大谷著『自由国民教育』久連国民高等学園出版部，昭和 8 年 3 月発行，7 頁。
47)　同書，8 頁。
48)　同書，21頁。

すなわち，国民高等学校の本質であります。」[49] と，国民高等学校は制度に関しても，また教育実践に関しても，「自由」を本質とするという認識を明確に示している。

この国民高等学校本質論は明らかにヨーロッパ留学の直接的・間接的な成果であった。彼は滞欧研修によってドイツ，デンマークの国民高等学校の実態とその伝統に触れ，さらにその本質をも研究する端緒を掴むことができたが，それにもまして大きな収穫は日本の国民高等学校のあり方を反省し，改革創造していくべき思索の機会と道標が与えられたことではなかったか。

この小著の第三章「久連村塾について」であるが，これはまさに久連国民高等学校における実践の具体的方針を語るものである。そこにはあたかも久連の村落を，そして全国の農村を行脚して村人に語り掛ける修行僧のような姿が見える。それは「まえおき」のなかの「私，独りで何にが出来るものですか。どうぞ，みなさんの力が一つとなって，をし立て、行つて下さいませ。」[50] というような，極めて丁寧な言葉遣いにも窺えるのである。こうして「久連国民高等学園の特質」が，①独自の立場，②塾教育，③青年男女の教育道場，④労作教育，⑤郷土教育，の各項目について簡潔ながら具体的に解説されている。この章は，全国の，とりわけ農村の青年やその親たち，そして村民に対して学園の存在と独自の教育をアピールすることを目的として書かれている。それは恐らく，生徒募集をも念頭において書かれた部分と推察される。そのために彼は，前章において国民高等学校は「どこどこまでも，人格陶冶を眼目としてゐる」としながらも，単に農民乃至農業を目的する教育を行う所ではないという独自の立場の解説には苦しんでいるようである。例えば④労作教育に関して，「私たちの塾は一軒の農家とし又一百姓としてのほんとの生活を辿らうとつとめます，けれどもそれは一個の農民となるためではないのです。私たちの塾は一国民とし

49) 同書，27～28頁。
50) 同書，30頁。

ての農民たらうと努めるのです。」[51] と説明しているが，それは多くの人々にとっては必ずしも明快とはいえないであろう。しかしながらそこには，新しく発足しようとする久連国民高等学校が，興農学園の原点ともいうべきかの渡瀬寅次郎の遺志「範を丁抹の国民高等学校にとり，基督教的信仰を基礎とせる精神教育，及び実際に則したる教育を日本農民に施さんとする学校」[52] の理念を貫きながら，しかも当時の日本農民や農村男女青年に対してこの学園教育の精神と特質を如何に解り易く説明するか，若き新校長大谷の濃やかな配慮と努力が窺えるのである。

〔日課・授業科目・労作等〕

久連国民高等学校として発足した当時（昭和８年）の夏期学期の日課，授業科目等は下表の通りである。興農学園創設当時と比べ若干変更されているが，基本的な変更はない。

（イ）日　課

午前		午後	
4：30–5：20	起床・洗面・体操 掃除	12：00	昼食 自由
⇩		13：30	出発
6：00	朝食 国旗掲揚	14：00–18：00	労作又は演習
7：15	礼拝	19：00–20：00	夕食 講演・会合・整頓 消灯
7：30–11：30	学科講義		

（ロ）授業科目・労作等

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
月	協同組合	世界史	作物	作物	奉仕又ハ労作	同	同	同	講演
火	公民	経済地理	果樹	果樹	労作演習趣味	同	同	同	講演

51）　同書，34頁。

52）　大谷著『日本村塾教育』関谷書店，昭和十年，40頁。

水	日本史	数学	農業経済	農業経済	労作(全員)	同	同	同	講演
木	宗教	協同組合	蔬菜	蔬菜	労作(全員)	同	同	同	特別講演娯楽
金	商事要項	心理学	数学	世界史	労作(全員)	同	同	同	家族会議
土	経済論	簿記	国文	補助	奉仕又ハ労作	同	歌	歌	自由

(昭和8年6月10日発行『興村』第一号所収の資料より)
(備考) (1)夏期学期は5月1日～7月末まで，冬期学期は11月1日～翌年3月末まで。
(2)日課や授業科目等についての説明は省略した。大谷著『日本村塾教育』「第三章・一日一生」を参照されたい。

(四) 村塾教育運動の展開

〔体験からの発想〕

興農学園は久連の村落における私塾として出発した。「山村の塾教育の体験」(『自由国民教育』の「序」より）は農村青年教育の実践とその理論に関する大谷の原点であった。そこで文字通り師弟共働の生活を通して農村青年を育てた体験は，彼に「松陰の塾，寺子屋，なんと懐しい日本の教育」(同書，31頁)という共感をもたらした。そして多くの学校教育に見られる「教師と生徒のへだたり」「それは生きた教育ではない」(同上）と実感したのである。また彼は「村落の人々と，従来の学校のやうにへだたりや隠遁やをさけ，村落の中にあつて，村の一農家，一お百姓としての教育をしたい。」(同書，33頁）そのような環境でこそ「まことの国民教育が可能」であると感じたのである。さらに彼は「個性尊重と自治教育」に関して「青年自身の本質は，教師と弟子との間でも，親子間でも，夫婦間でも発見が困難でありますが，『友だち』の間で，たやすくほんとの特質が発見されます。」「これが自我意識となり他我の理解となり，そこに真の自由の世界が意識され，自治の本義を解し得ると思ひます。」(同書，35頁）と言う。それもまた単なる青年心理学の知識ではなく久連の体験によって裏付けされていることは否めない。

しかし同時に見落としてならないのは，さきに考察した自由国民教育の思想が村塾教育の基礎にあることである。それは初期興農学園の体験の後ドイツ及びデンマークの国民高等学校に滞在し，そこにおいて体験・習得かつ思索した成果と見られるであろう。

〔村塾教育とは何か〕

このようにして彼は自ら久連国民高等学校を村塾と呼び，そこからまた村塾教育という言葉もしばしば用いるようになったのである。そしてこの自らの実践を日本農村教育の改善に寄与する運動に発展させようとしたとき，おのずからその意義を明確に規定する必要に迫られたのである。彼は久連国民高等学校開校2年後の1935(昭和10)年7月に発行した『日本村塾教育』（関谷書店刊）の「第一章　村塾教育の意義」において，「村塾教育とは塾名（校名）の如何，塾風の如何，規模の大小及び経営者の公私の如何に不拘，専ら，塾長（又は校長）の人格識見の下に農村青年男女の区々別々な心眼を開かせ，確然と統一された思想，信念をもたせるために肉体的な・精神的な鍛練陶冶をなし，以て，将来，一農民として奮闘すると共に，行詰れる農村更生の陣頭に立つて，農村を指導する所の，有為の青年子女を養成する一切の教育を指すのである。」（同書，１～２頁）と，その意義を規定している。そこで村塾の立地に関して触れていないことが疑問として残るが，それは「第五章　陶冶論」の中で，「村塾と環境」という項において次のように述べている。すなわち「現下の日本農村に於ける（殖民地は別として）村塾は，村落のうちにあって，村の一農家として存立せねばならぬ。」（同書，20頁）と言い，さらに「繰り返へして主張する。ホントの村塾教育は，山の中や，野原の中ではなく，村落の中に在つて，地元民と共働し得るやうな環境でなければならぬ。」（同書，21頁）と念を押している。やはり「村落の中」にあることは，村塾教育の不可欠の条件であったのである。

さきにも触れたが，村塾教育運動は自由国民教育を本質とする。政治的・行政的な観点からは「村塾教育運動を以て，技術本位の農学校教育と考へ

てはならぬ，殊に，当局政策実現の手段と考へてはならぬ。」（同書，２頁）と考えている。また教育方法的視点からは「塾に於ては，常に，塾長及び教師の『生きた言葉』を貫いて青年男女の眠れる魂——神性——への覚醒がなされねばならない。斯くすることによって初めて，個人の自覚的陶冶が出来，人間が人間として，国民が国民として，農民が農民としての協同体への意識を深め得ることになるのである。」（同書，３頁）と考えるのである。このような基本的性格を基礎としながら「現代的村塾教育」は次のような特質をもっているという。即ち，

一，個人的啓蒙は勿論，協同社会建設を目標としている。
二，青年期を主たる教育対象とする。
三，凡て，凡以下の教育である[53]。
四，読書，算以外に広く農村の実生活に必要なる社会，経済，道徳，宗教と云つた高級のものを秩序的に，集約的に研究指導する。
五，住込主義であり，日々の生活は宗教的である。
六，農場を重要視し，労作の一切に科学的な・思想的な背景を与へる。
七，農村協同社会建設のために，農村人として必要な各般の学科技術を授ける。
八，村落協同体建設の中堅人物養成を主眼となす。
九，現代の社会批判が許される。
十，官立のものもある。
十一，農民意識的である。　　（同書，５～６頁）

これらの特質は単に当時の比較的新しい塾風教育の特色を客観的に比較分析した結果というよりも，むしろ大谷が考える「具備すべき，望ましい特質」，言い換えると運動の諸目標乃至諸原則ともいうべき項目をも多分に

53）それは「一人か二人にしか望み得ない英雄的な，聖人君子的な者を養成すると云つたような教育であつてはならない」（同書，３頁）という意味である。今風に云えば農村のエリートのみを集めた教育であったり，エリートを目標にした教育ではない，ということである。

含んだものである。

〔月刊紙『興村』の発行〕

大谷英一を校長とする久連国民高等学校が発足して，夏期部が開始されたのは1933（昭和８）年５月であったが，翌月６月10日付をもつて『興村』創刊第一号が発刊された。編輯兼発行者は大谷英一，発行所は久連国民高等学校出版部，印刷者は財団法人興農学園印刷部となっている。冊子のサイズは，創刊から昭和15年４月10日発行の第72号迄Ｂ５判で，次号からはＡ５判となっている。頁数は最初の数号は６～８頁であったが，それ以後は特別の場合を除いて４頁となっている。因に，『興村』は第八十三号（昭和16年３月10日発行）まで新聞紙法により出版された。昭和16年４月より「雑誌」となり，第一巻第一号として発足したのである[54]。また，昭和14年３月発行第五十九号から，同窓会の誕生とともに同紙は「久連国民高等学校同窓会機関誌」（紙）とされることになった。（同号の記事による）

さて，創刊号に戻るが，その冒頭の記事“何故「興村」が生れたか”には，かなり強い地方訛りで「私の許で生活をした人々が段々増いてまへりますので，それらの人々の生活が知りたいことや，思ひながらつい筆不生のためにお便り出来なかつたりする人々へのお挨拶をかねて私たちの生活が，思想が，教育が，少しでも存在に値するものなればそれを，お知らせすることもあながち無意義のものでないと思ひまして，かうゆつた意味で不完全な私たちの思想と体験を世に問ふことになりました。」と書かれている。そこでは本誌が，大谷始め学園指導者たちと卒業生たちとの日常的交流及び情報乃至思想交流の場として期待されているのであるが，しかしそれだけではない。次いで「農の日本を改革するものは先ず，ホントの人だ，農村日本を更生するには善良勇敢な青年男女が必要だと申されます。然し今日は只単にそれが必要性を高張する時でありませんで，それが実践の時代なのです。」「『興村』はこうした大きな使命の下に生れたものです。私の

54）『興村』第一巻第一号（昭和十六年四月十日発行）７頁「興村の新体制」に記載。

許で生活をされた方は勿論，その他同情ある方々はどうぞ『興村』を御援助下さいませ。」という。本誌は卒業生のみならず農村青年男女一般に対し，農村更生のための啓発を目的とする啓蒙紙ともなることを意図されていたのである。さらに本紙は学園のいわゆる村塾教育運動への理解を広め，ひいては「村を更生させ」「発展させる」興村運動実践の輪を広げることをも視野に入れていたのである。それは同年11月発行の第四号の巻頭記事“日本村塾運動を確立せよ”（大谷英一）や昭和10年３月発行第十一号の巻頭記事“興村運動とは何んぞや”（同上）によっても明らかである。そして「村塾教育運動は興村運動最高の道であると信ずる。」としている。そこに『興村』発行の最も大きなねらいがあったのかも知れない。上に見たような基本的な役割に併せて，『興村』は学園の生徒募集に関する機能をも託されていた。各期開始の前に生徒募集の広報記事が載せられている。それは学園教育の実践と不可分の関係にあり，極めて当然なことであろう。

このように見てくると，『興村』の発行それ自体が日本村塾教育運動並びに興村運動の一環であったことがわかる。したがってこの運動は卒業生の居住する地域の広がりとともに全国津々浦々に広まる可能性を持っていたのである。少なくともそのような夢をもって発行されたものと思われる。

（五）久連国民高等学校の歩み

〔生徒募集と生徒数〕

久連国民高等学校の発足時即ち夏期部生徒の名簿が『興村』第二号（昭和８年７月発行）に発表されている。それによると，研究生６名，夏期部生徒12名となっている。研究生と夏期部生徒との違いについては不明であるが，少なくともこの時点においては両者併せて18名が在学していたことがわかる。「冬期部生徒募集」について数行の記事が同紙第一号に掲載されているが，詳細は本校宛に募集要項を請求することになっているので，募集人数はそこではわからない。現存する資料のなかで比較的詳しく募集内容が掲載されているのは『興村』第十号（昭和10年２月発行）及び第十一

号（同3月発行）である。それこでは次のように記載されている。

一，資　格　　高等小学校卒業程度以上の学力を有し将来農村開拓者たらんとする者に限る

二，年齢及募集人員　　少年部　十五歳以上／青年部　十八歳以上　合計　三十名

三，学費　　月　謝　三円
食　費　月　夏部　七円
冬部　十円

四，入学金　　入学者は入学手続書と共に金弐円を納入のこと
此の入学金は最終月謝に充つ，但し入学取消の際は変か返金せず

五，申込〆切　　昭和十年四月十日

六，期　間　　少年部　自昭和十年五月～至昭和十一年三月末日
青年部　自昭和十年五月～至昭和十年七月末日

（以下省く）

そこで注目されるのは少年部と青年部に分けられていること，そして前者の在学期間が11か月で，後者が3か月という短期間であることである。

ところで翌昭和11年9月発行の同紙第二十九号で「第十期生募集」が行われている。その募集の内容を見ると，以前の少年部が第一部，青年部が第二部となり，在学期間が大幅に延長されている。その「三，期間募集人員」の項には次のように記されている。

第一部　二ヶ年　十五名
第二部　一ヶ年　十五名

この「第十期生募集」の記事は第三十二号（同年12月発行）まで毎号継続して掲載されている。しかもその要項の前文に丁寧な挨拶まで付けられている。そこでは校長大谷が「本校出身者」に対して「適任者御推薦を御願ひ」したいという切実な心情が吐露されている。そこには「十ヶ年の準

備期」を終えて「次の十年」に向けての「前進あるのみ」という彼の新たな決意があったのである。それは同紙第三十号の「第十期生募集」と共に掲載されている記事「村塾運動の徹底強化」——学校本部——によって強く表明されている。

日中戦争が始まった年1937（昭和12）年の秋から第十一期生の募集記事が掲載されている。その記事が極めて簡略で小さいことが気になるが，内容的には変化はないように思われる。しかし翌昭和13年暮の同紙に掲載されている「生徒募集」でとくに注目されるのは，校長大谷の「私の気持」として表明している次の言葉である。即ち「移民も必要であるが内地を守る者はより必要なのである。（中略）我等内地農村を守るものは日本農村と日本国の栄化を信じつゞけるであらう。」「私はこの考へから内地農村に残つて働く青少年の教育に全力を注ぐことにした。」と書いている。当時わが国内において満洲移民が奨励され，さらには加藤完治らによる「満洲開拓青少年義勇軍」創設の提案が政府によって採択され，昭和13年３月から日本国民高等学校長であった加藤が内原訓練所長に就任して，応募してきた青少年に対する内地訓練を開始していたのである。（拙稿『近代日本における国民高等学校運動の系譜・六・加藤完治（下）』に詳しい）したがって当時国を挙げて満洲開拓への農村青少年勧誘が進められつつあったのである。そのような国内情勢の下での久連国民高等学校の存在理由を，大谷は上のように確認し，世に訴えようとしたものと推測される。

さらに当時すでに農村青年は応召によって戦争に駆り出されていたから，学園の生徒募集は急速に困難となりつつあったであろう。それ故大谷は「卒業生諸君に」として「日支事変によつて農村はよき質を失つた。諸君の友人の多くは応召されたことであらう。併し，銃後の守りを真実ならしめるために諸君と協力し或は貴君に代る人物を養成して置かねばならない。どんなことがあつても一人が一人づゝよき友を久連に送つて欲しい。」と懇請している。戦争によって農村は，興村どころか急速に荒廃しつつあったのである。

ところで昭和15年２月発行の『興村』に掲載された生徒募集によると，「高等小学校卒業程度以上の学力を有する十八才以上の男子」を資格とし，募集人員は「二十五名」となっている。その前年には「十五才以上の男子」とされていたのが，ここで変更されているのである。しかもこの同じ生徒募集記事が４月発行の紙上まで掲載されている。恐らく願書〆切日の３月末までに予定した応募数に達しなかったのであろう。戦争は次第に農村の労働力就中若者を動員し，しかもその生命を奪って行ったのみならず，村を離れて久連の村塾教育に参加するような余裕を精神的，時間的そして経済的に持ち得なかったのではなかろうか。

しかし，そういう状況にもかかわらずその翌年の生徒募集（昭和16年１月）では，再び第一部，第二部に分けられ，年齢は「十五歳以上」と「十八歳以上」となり，期間も，「二ヶ年」と「一ヶ年」で，数年前に戻っている。そして「塾生募集に就て，卒業生諸君に告ぐ」という見出しで「臣道実践の先駆者として活動せられる諸君に対し一人でもよき同志を推薦されんことを切望してやみません。」と，協力が要請されている。しかもこの募集記事を含めて２頁の大半を「塾生募集欄」に充てられ，そこには先ず，現学園職員の「感動の塾生活」というかなり長文の体験記が掲載されている。

財団法人興農学園は昭和17年４月から従来の国民高等学校とは別に西浦農学校を発足させることになった。その生徒募集（『興村』第二巻第二号）によれば「柑橘栽培技術に堪能なる日本農道者の養成」を目的としている。入学資格は「国民学校初等科六年修了の男子」とされ，募集人員は30名である。これに対して本家たる久連国民高等学校の生徒募集は，募集人員20名，資格は「国民学校高等科二年修了程度以上の学力を有する十五歳より二十歳迄の男子」となっている。この柑橘栽培技術の修得を目的とする農学校の併設は，より基本的な意味においてそれは「村塾教育の時代的転換」であったのである。その意味に関しては後述するとして，その生徒募集の結果は如何。それは同17年５月発行の同誌第二巻第五号の記事「静岡県西浦農学校入学式」に発表されている。入学式は４月８日に行われた。そこ

には「生徒十五名，塾生三名を以つて式をあげた。数日後生徒二名塾生一名増加合計二十一名が現在員である。」と記されている。淋しい限りと云わざるを得ない。殊に国民高等学校の新入生４名とは余りにも厳しい現実である。

〔年次別卒業生数――昭和４～15年〕

『興村』第八十二号（昭和16年２月発行）付録の「久連国民高等学校出身者名簿」により出身年次別卒業生数と，その住所による道府県別等の分布を見ると下表の如くである。（但し，短期生は除かれている

出身年次	出身者数	出身者の住所による道府県別数等	死亡
昭和４	16	東京・長野各３，兵庫２，千葉・静岡・石川・大阪・岡山・広島・鹿児島各１，	1
昭和５	23	静岡６，長野４，東京・兵庫・佐賀各２，北海道・山形・千葉・埼玉・三重・広島・熊本各１	
昭和８	26	東京５，栃木・長野・山梨各３，愛媛２，山形・新潟・群馬・静岡・福井・愛知・和歌山・徳島・朝鮮各１	1
昭和９	21	静岡４，長野３，東京・栃木・朝鮮各２，北海道・愛知・三重・徳島・愛媛・大分・宮崎・沖縄各１	
昭和10	17	静岡５，東京・栃木・沖縄・朝鮮各２，長野・兵庫・広島・大分各１	
昭和11	14	静岡５，中国２，秋田・千葉・東京・栃木・富山・愛知・兵庫各１	
昭和12	14	静岡５，徳島・朝鮮各２，東京・山梨・沖縄・満洲各１，応召中1	
昭和13	9	静岡４，北海道・千葉・栃木・三重・京都各１	
昭和14	15	朝鮮６，静岡３，東京・埼玉・長野・愛知・兵庫・山口各１	
昭和15	12	静岡３，朝鮮・満洲各２，山形・東京・栃木・長野・島根各１	
合計	167名	165名	２名

（備 考）同名簿には，上記の正会員の他に賛助会員として，前職員５名及び校長以下現職員９名の氏名も記されている。

（五）村塾教育の時代的転換

〔村塾運動の脱皮と西浦農学校の併設〕

すでに見てきたように，興農学園は1942（昭和17)年4月から国民高等学校に並んで西浦農学校を発足させた。その目的は「柑橘栽培技術に堪能なる日本農道者の養成」にあった。これは興農学園の在り方にとって極めて重大な方向転換であった。この転換に関して，大谷は『興村』第一巻第三号（昭和16年6月発行）の巻頭，「村塾教育の時代的転換」と題して，その決断に至る経緯と意図を表明している。彼は冒頭「今や私の久連生活は再度脱皮せんとしてゐる」と云い，今回二度目の脱皮であることを示唆している。その最初の脱皮は，彼が欧州遊学から帰国し，興農学園を再興して久連国民高等学校を発足させたときである。それは端的に云えば「模倣」からの脱皮であった。「余りにアメリカ化された丁抹化された教育精神が混入されて居つた」興農学園教育からの脱皮であったという。それを引き継いで今回二度目の脱皮を遂げようしていると訴えている。

その脱皮とは基本的に彼の信仰乃至信念に関わるものである。しかもそれは最初の脱皮と無関係ではなく，むしろその線上における一層の深化であり，徹底化であるといってよい。自ら述懐するところによれば，彼は昭和15年まで久連において「渡瀬先生の遺されし若干の基金と土地とを中心にして孤軍奮闘」，「骨味をけづる」（味は身の誤り＝宇野）「戦争」を続けた結果，ついに過労のため同年3月から3か月間闘病生活を余儀無くされたのであった。「死線をさまよふた私の病気は私に強きものを与へられた」，「私は益々天国を信じ得る者となるにつれて，我日本人なりの自覚が強まって来た」，そして「日支事変の五年目に至つて我日本人であり同時に我基督者たることに少しも矛盾を感じなくなつた」，こうして「私は再び脱皮した」のである。彼は当時の一般国民の一人として，皇室を中心とする神国日本を信じていたのである。ここから彼は「神の為に生きること，基督のために生きること，即ち一切が天皇の為なのである」，と自らの内なる信仰乃至信念の縫合ともいうべき調停を成し遂げたのである。この内面の脱皮

を基礎に彼の村塾運動者としての時代的転換が導かれたのである。彼は，塾運動も「抽象的な信念教育では不徹底である」，それは日本農村の「具体的問題を中心にして展開されねばならない」と考えるようになった。こうして彼は自らの興農学園に関して，「青年の道場たる国民高等学校を核心とし」同じ場所に「西浦農学校を設立して地元少年を教育し」，さらに「柑橘試験場を設立して久連地方の実際問題の指導」も成しうようにしたい，即ち「遠きより先づ，近きに道を求めたく思ふ」たのである。西浦農学校誕生の背景にはこのような経緯があったのである。

〔農道塾への転換〕

1942(昭和17)年12月10日発行の『興村』誌において，興農学園財団本部は国民高等学校を『農道塾』に改めることを発表した。その理由として次の四点を挙げている。

一，日本農道者養成を主としたこと
二，学力及年齢を統一したきため中等学校卒業程度以上としたこと
三，従来の制度にては青年学校との関係が複雑化して来るため塾教育に徹し得なくなつたこと
四，小学校が国民学校と改称された結果国民高等学校と誤解され易くなつたこと

そして同時に「塾生・生徒募集」を行っているが，『農道塾』の応募資格は「中等学校卒業程度以上の学力を有する者」，年齢は「十七歳ヨリ二十五歳マデノ男子」，人員は「二十名」とされている。

すでに見てきたように，同年4月に発足した西浦農学校は「柑橘栽培技術に堪能なる日本農道者の養成」を目的としている。そして今またその母家である国民高等学校をも農道塾に改称しようというのである。上の改称理由の最初に掲げているように，それは「日本農道者養成」の徹底を期さんがためである。彼は前年（昭和16）に『余の日本農道観』という著書を出版しているが，それ以前から『興村』のなかで自らの農道観を世に訴え

ている。同紙第八十一号（昭和16年 1 月）に「余の農道観」を掲載しているが，そこで彼は「農道とは農民として又農業者として守るべき道を云ふのである」と云い，さらに「農民としての本分即ち人としての本文を守ることゝ農業者としての本分を守ること即ち農業と云ふ職業を通して守るべき本分を指して云ふのである」と解説している。しかも，その農道は神の存在を意識することなくしては本物とはなりえないのである。彼によれば「真の農道は神の存在を意識しつゝ神の経綸たる農業と言ふ仕事に徹することによつてのみ把握されるものである。」彼はその後しばしば農道を論じ，遂には自らの到達した所謂「日本農道観」を披露するようになる。そうして昭和17年 2 月発行の『興村』誌上「続・日本農道観」では，次のような結論を導き出している。

「結論を要約すれば基督教的農道が日本農道に止め揚げされるためには第一に日本的思考の限定をうけること第二に最も重大である国体的限定をうけることである。

我らはグルントウィの言葉の如く基督信徒となる前に先づ日本人たらねばならない。真の日本人たり得ることによつてのみ余の基督教的農道観は日本農道観にまで発展し世界史的意義を有する真の日本農道観たり得るものと思ふ。」

大日本帝国憲法に規定されていた通り，日本国民にとって天皇は神聖不可侵な存在であった。そして国民否臣民の倫理観の淵源は教育勅語にあり，農もまた単なる営農ではあり得ず「天壌無窮の皇運」を「扶翼」しなければならなかったのである。彼の興農精神とキリスト教精神もまた，厳しい戦局のなかでますます強く「神の為に生きること，基督のために生きること，即ち一切が天皇の為なのである」という使命観と結合していったのではなかったか。

〔西浦農学校閉鎖〕

1943(昭和18)年 1 月発行の『興村』及び翌月発行の同誌に，興農学園本部による「塾生・生徒募集」が行われている。その内容は前年とほぼ同様

であるが，農学校に関して「甲種農学校認可申請計画中」と付記されている。そこには校長大谷の「日本農道者養成」をより充実徹底させようとする強い意欲が感じられる。然るに，その翌月即ち３月10日発行の『興村』誌上には突如として「西浦農学校閉鎖決定」という記事が掲載されているのである。それは次のような極めて簡単な事後報告である。

「昨年二月七日文部大臣の認可を受け絶大なる期待をうけて発足せし西浦農学校も当局の要請に基き国策遂行の線に副ふて閉鎖することに決定した。
　併し，財団は存続されそれが事業たる農道塾柑橘科学研究所，農場等は継続されることになつた。」

また，同誌末尾の「編輯室」の欄には筆者「加藤」により「西浦農学校の閉鎖は残念だ。職員生徒共に断腸血涙を流したるも，二月三日新し農道塾は文部大臣より認可され強く発足することとなつた。世の期待に添ふべく歩をかためつつある。」と記されている。

この西浦農学校の閉鎖がいかに当局の不当な要請によるものであったか，それはいうまでもない。まさにそれは民間教育活動の弾圧そのものであったと言わざるをえない。晩年大谷はこの当時のことを回顧し『遺稿』として書き残している。故人の子息大谷光三氏より提供された『遺稿』の一部によれば，次のような状況があり，かつ経緯があったのである。即ち，大東亜戦争が苛烈となるにつれて，学園がキリスト教の精神に立っていること，また生徒のなかに朝鮮，中国出身者がいること，そして外国人の来訪が多いことなどによって，村人たちが校長大谷を「自由主義者」だとか外国の「スパイ」だとかの風評を立て，やがては特高警察や憲兵によって大谷本人のみならず家族までもが尾行されるようになっていた。それどころか大谷家の子どもは学校で近所の子どもから「お前の家から青い火の手があがる」などと脅かされるようにさえなっていた。

さらに戦争が激化してきたとき，最初は陸軍の上陸用舟艇隊一ヶ中隊が，

後には海軍の「錨部隊」がやってきて，次々に学園施設を接収，ついには駿河湾を前面に見下ろす高台にあった礼拝堂の裏手に特攻隊基地のための砲台二門が据えられ，礼拝堂は弾薬倉庫として接収されてしまったのである。こうして学園は，西浦農学校の生徒たちを県立の沼津農学校と静岡農学校に分散して収容してもらい，久連における農学校の教育活動は停止せざるを得なくなったのである。

以上は大谷英一『遺稿』により西浦農学校閉鎖に至った経緯を見てきたのであるが，他方，辛うじて残された久連の農道塾はどうなったのであろうか。それは形式上残ったことにはなっていたが，学園の建物の大半が軍に接収されて，塾生の宿泊する場所もなくなっていたとすれば，実質的には閉鎖も同然という外はあるまい。その後の塾生指導がどのようになったのかは，不明である。なお，機関誌『興村』の名称は同年 4 月発行の第三巻第四号を以て打切られ，次号（通巻109号）から『日本農道』と改称されている[55]。大谷始め学園関係者及び同窓会の本意ではなかったであろう。

大谷が戦後矢板市長を務めていた頃，ある雑誌の編集部の質問に答える談話[56]のなかで，この当時のことを語っているが，それによると，学園に対する弾圧の厳しさに耐えかねて，知人に相談した結果，まずは大政翼賛会に，次いで翼賛壮年団[57]に関わったという。それによって弾圧から免れることができたのであった。しかし間もなく敗戦，教職追放により「創始者には申し訳ないが，おわびして，子供たちを背負って，故郷に帰った」のであった。したがって財団法人興農学園は存続してはいるが，学校及び塾そのものは大谷校長の追放とともに消滅したのである。それは単に大谷個人乃至は興農学園のみの問題ではなく，わが国における国民高等学校運動さらには民間教育運動の歴史にとっても極めて悲しむべき終末であった。

55)　「興農学園略年表」沼津市明治史料館（2000年12月）による。
56)　「大谷英一氏に聞く」『松前文庫』第二十一号、東海大学（昭和55年 4 月発行）
57)　昭和18年 8 月静岡県翼賛壮年団農村委員会・思想委員会の委員となり，同 9 月には西浦農学校が静岡県翼賛壮年団道場となり，大谷はその塾頭となった。（前掲「興農学園略年表」による。）

〔その後の大谷英一〕

大谷が教職追放によって久連を去ったのは1946(昭和21)年秋であった[58)]。40歳を過ぎたばかりの壮年であった。郷里栃木県に帰った大谷はその2～3年後新設された地区公民館に館長として迎えられたという[59)]。そして50年代に入り，栃木県社会教育委員，同県議会議員，同副議長，同県教育委員会委員，同再選後委員長に就任するなど地方の教育や県政の改革に貢献したが，その「バイブルを心の支えにして」「常に，謙虚な心を持して忘れず，和を重んじて政治を進めていきたい」[60)] というはったりのない人柄と姿勢が認められて，74(昭和49)年矢板市長に選ばれ，さらにその「卓越せる識見と才覚手腕」とりわけ総合文化会館などの「教育文化施設の拡充」や公害のない「屎尿処理場」の設置等の功績が高く評価されて[61)]，78(昭和53)年再選され，82(昭和57)年9月退任した。94(平成6)年9月16日逝去。

お　わ　り　に

まさに昭和の初め，渡瀬寅次郎を始祖とする興農学園を母体として静岡県田方郡西浦の海岸久連に発足し，幾多の苦難を越えて進められたキリスト教主義に立つ国民高等学校運動を，その中心的指導者を焦点において考察してきた。その運動はそれがキリスト教という宗教的・精神的基盤に立つが故に，その指導者，そしてその施設さらにその実践活動は住民から白眼視され，ことに戦局が苛烈化し国家主義的・軍国主義的権力の指導性が強まるにつれて，憲兵や特高によるスパイ視がはじまり，ついには陸海軍による施設接収などの弾圧が加えられたのである。まさに昭和時代におけるキリシタンの迫害に外ならない。

この運動は，国民高等学校運動としては単に一つの学園を中心とする小

58) 前掲「興農学園略年表」による。
59) 前掲「大谷英一氏に聞く」『松前文庫』。
60) 「大谷英一」『郷土を築く人々』，自治新報社、1981。
61) 同上。

規模のものであり，それに関わった指導者や協力者の数は決して多くはない。しかし，その約20年の実践過程は熱意に溢れ，苦闘に満ちている。「はじめに」で触れたように，1934年協調会が発行した『農村に於ける塾風教育』では，興農学園は「見落すべからざる」ものではあるが，「未だ之に倣ふものを見ざる為」，運動として扱わないことにしているが，それは真実をよく見ていなかった為である。平林とりわけ大谷の実践活動は学園の中だけに留まらず，全国の農村・農業関係者に与えた影響は大きかったと思う。なかでも『興村』誌による卒業生を中心とする啓発は，多忙のなかにおける農民啓発運動の勝れた実践そのものである。その辺の考察はなお十分ではないが，一応ここで筆を止めることとしたい。

（最後に）この小論作成に当り貴重な資料を開示又は提供して下さった国公私立図書館及び資料館，またご協力頂いた方々に心から感謝申しあげます。とりわけ沼津市明治史料館の職員の方々，栃木県矢板市にご在住の大谷光三氏，久連国民高等学校の言わば生き証人として学園跡地や農場を案内して頂き，さらに在学当時の体験を語って頂いた久連ご在住の渡辺進氏からは格段のご助力を頂きました。ご迷惑をお掛けしたことをお詫びすると共に，深く感謝申しあげる次第です。

〈追録〉　愛農家・伊藤　等（いとう・ひとし）の生きざま

――興農学園に学んだ広島の農業青年――

私が伊藤　等という人の存在を初めて知ったのは，沼津市明治史料館より提供された「久連国民高等学校出身者名簿」（昭和16年２月発行『興村』第八十二号付録）によってであった。同氏以外にも広島県出身者数名の方々の名前があり，お会いして久連の思い出などを聞くことを期待して，同名簿を頼りに広島市郊外や福山地方を尋ね歩いたが，ほとんど手掛かりを得ることはできなかった。伊藤氏の出身地，現佐伯郡大野町更地を最初に訪ねたのは2001年２月12日であった。しかし同地は山陽新幹線敷設のため集

落の大半が他地域に移動，伊藤氏の生家もそこにはなかった。その後間もなく，幸いにも伊藤家のご遺族やご親族と連絡をとることができた。そして今は亡き伊藤氏についてのお話を聞く機会を得るとともに，貴重な資料を提供して頂くこととなったのである。

以下，このような経緯で収集された資料や見聞，就中『興村』誌の記事に基づき，興農学園卒業生としての伊藤　等という人物について，若干の考察を試みることにしたい。そうすることによって，同時に，かつての久連における興農学園教育の歴史的現実を確認することにもなると考えるからである。

〔久連国民高等学校に学ぶ〕

伊藤　等は1935(昭和10)年度の久連国民高等学校出身者の一人である。1915(大正４)年３月生れの彼はこの年20歳を迎えていたから，18歳以上を応募資格とする同校青年部に在学していた筈である。そして在学期間は同年５月から７月までの３ヶ月間であった。この久連の生活は，僅か３ヶ月であったとはいえ彼にとって終生忘れることのできない思い出を体に刻みこんだように思われる。それは後年彼が従軍兵士となって戦場から学園（園長）に寄せた便りの中にも読み取れる。「(前略）私が久連を去つた日のことが心に浮びます。あんな感動と力とにみちた時を又得る機会があるでせうか。後四五日だと私も思ひ皆様も止めて下さつたのに，遂に自制出来なかつた程に私の心には新しいものが飽和してゐました。」と言い，さらに「以来瞬時の退転もなく『小天国』の完成を急ぎました。今も尚小さな花園の夢にこもつて皆様の天国を覗いてゐます。小さな花苑私の幸福は此処に丈あります。(以下略)」(『興村』昭和17年８月）と書いている。彼の言う「小天国」とは，久連で学んだ農業の天国すなわち理想郷であったと思われる。

〔従軍と母校への便り〕

農家の長男であった彼は恐らく農業に強い使命感を持ち，それ故にこそ遥か久連に道を求めたのである。そして３ヶ月の修学は彼に大きな夢と希

望と情熱を与えたのである。修学期間の終わるのを待ち切れず帰郷し，その夢を実現すべく農業に取り組んだのである。しかし1937(昭和12)年夏に始まった日中戦争は次第に戦線を拡大し，多くの青年たちを次々に戦場に駆り出した。理想郷を夢に描いて郷里の農業に取り組んでいた伊藤　等青年もその例外ではなかった。彼が何年に入隊し，いつ外地に出動したのかは不明であるが，『興村』昭和14年３月10日号の「よきおとづれ」欄に，次のような彼の戦地からの便りが載せられている。

「故郷から興村を送つて呉れます。同志が続々入営従軍するのは愉快です。再び南支から北支に来ました。幸ひ傷一つ負はず○○に入城しました。」

この便りによって，伊藤青年は以前中国北部に従軍し，次いで南中国に転進し，そして再び北部に戻ったという転戦の経過を読み取ることができる。彼自ら言っているように，この間傷一つ負わなかったことは実に幸いであった。このようにして伊藤青年から久連の学園（長）宛の便りを『興村』誌の「戦地だより」或いは「兵営だより」としてしばしば掲載されているのを発見することができる。それは新年の挨拶であったり暑中見舞いであったり，また『興村』誌を受け取ったことの感謝と報告であったり，時には新しい駐留地の観察報告であったりと，昭和17年11月号の『興村』誌上まで続いている。ただしその間一度（昭和16年初頭頃）帰国していたようである。したがってその便りは戦地からではなく広島からのもので「出征中の御厚意を感謝し新しき更生を誓ひます，云々」という文面になっている。或いは病気療養の一時帰休であったかも知れない。なぜならこの年の12月の『興村』では，「兵営だより」のなかに彼の便りを見出だすからである。しかもその便りは短歌として寄せられている。すなわち，次ぎの一首である。

「秋草の枯れにし伏しぬ霜を得て

なほ散りあえぬ野菊をぞ懐ふ」

彼が「なほ散りあえぬ野菊」に託して訴えようとしている心情を今にして思えば，ただ絶句するばかりである。彼はその後再び外地に派遣されたのである。

伊藤青年に限らず久連の学園を去った青年たちが，このように戦地に在っても学園を忘れることなく便りを送り続けたことは注目に値するものである。それは一つには『興村』誌が媒体として重要な役割を果たしていたと思われるが，しかしそれも，在学中のキリスト教精神を基礎とし，しかも師弟共働の村塾的農業教育を中心とする久連の学園生活の感動的な体験として青年たちの心の中に生き続けているからに他ならないであろう。

〔戦地における農業観察〕

伊藤青年は大陸における従軍中も常にその土地の農業事情に関心をもっていたようである。その最たるものは『興村』昭和14年11月及び12月両号に特集されている彼の寄稿「北支の事情」(一) 及び (二) である。それは当時行われていた日本農家の中国への移民に対する警告とも言うべき彼の見解である。要するに，中国北部の土地は元来塩分が多く含まれ，耕作し得る土地は極めて狭く，また乾季と雨季による災害が激しく，栽培可能な作物も極度に限定さることなど，農業者の立場から細かな事情を説明し，日本の小農が安易に移殖することは問題があることを論じている。かといって移民を全面的に否定しているわけではない。むしろ日本人は小農として中国人を押し退けて入植するのではなく，「資本，技術，機械，運輸等を投じ，又は耕作法の向上，河川改修，道路，鉄道を作るなどの方法を講じて,」中国の農業振興に協力し，同時に利潤を得ることを考えるべきではないか。中国において「邦人が手足となれば共倒れとなり，頭となつてやれば共に栄へるであらう」，と提案しているのである。これは彼が最初に断わっているように，諸雑誌等をも参考にして出した見解であるが，とはいえ農業に関する深い関心と基礎的な知識・経験のない一般の兵士には期待

できない提言である。彼の生家が農家であったこと，そして久連における修学体験，その成果と決して無関係ではないであろう。

〔敗戦後の興農活動〕

上に見てきたように，伊藤は戦地にあっても常にその地方の地質や作物さらには植物の状況に強い関心をもっていた。たまたま彼は中国南寧の作戦に従軍中，部隊が飢餓に瀕したとき偶然に発見した野草を，その後再度応召して駐屯したジャワ島で発見した。帰国にあたりそれを持ち帰り，自ら『共栄菜』（きょうえいな）と命名し広島周辺の町村民に苗を配布して野菜不足を補うことに貢献した。当時の新聞（朝日）によると，伊藤はすでに広島への原爆投下前からこの普及活動を始めていたようである。とすれば，さきに触れたあの一時帰休のときに始めのかも知れないが，とくに敗戦後の食糧難時代には一層熱心にその普及に努力したという。同新聞の解説によると，この植物は「ヴィタミン飢饉の援兵として味と繁殖力にすぐれた野草」で，学名を「セネシオ・プルプラセンス」と呼ぶ菊科植物ある[62)]。この野草が如何程の救世主的効果を果たし得たかは不明であるが，常人には真似のできない伊藤の人柄と活動力が偲ばれるのである。

さらに伊藤は，戦後の食糧危機打開のために重要な役割を果たした甘藷栽培の実践的研究者として貢献し，有名な存在であった。1947(昭和22)年４月10日の中国新聞は，彼を「芋作りの日本的な存在」「芋作り名人」として大きく報じ，本人が大きな芋を手にした写真も載せている。それによると彼は甘藷の栽培研究のために全国を歩き，大学を訪ね，文献を漁って，過去70種類を試作し，現在も20種類を栽培している。その結果反当たり８千貫の収穫を可能にしたと報じている。常識では信じ得ないので再三確認したが，彼は自ら独特の伊藤式栽培法を熱心に解説し，自信をもって事実で

62)　この植物は現在雑草として広島周辺の山裾や田畑や道路脇に広く分布するベニバナボロギクとみられる。『日本の野草』山と渓谷社（1983）によれば，第二次大戦中兵士たちが「南方春菊」「昭和草」と呼んで愛用していたもので，戦後西日本から次第に広がり関東にまで分布するようになったという。アメリカ原産の植物である。

あることを訴えたという。記者は「どこにその深い学問をひそめているのかといぶかるような地から生えた百姓姿で，泥によごれた大きな足跣のまま立ちあがつて穴ぐらからかご一ぱいに芋をいれてかゝえて出てきた，芋も大きいが氏の掌も大きい，云々」と書いている。そこには，根っから農を愛し，農を探求して，土と共に生きる伊藤　等の面目躍如たる姿が浮かぶ。

〔おわりに〕

伊藤は1964(昭和39)年１月24日入院先の日赤広島病院で他界した。満49歳直前であった。死因は原爆二次災害による原爆症である。それは彼が原爆直後，広島市内の後片付けに参加して罹災したものであるという。生前の彼を語った某知人の思い出によれば，彼は文字通り土に親しみ，常に鉢巻きをし，裸足か草履ばきで道を歩いていたという。今にして思えば，そのことと二次災害との関わりはなかったのだろうか。

彼は1927(昭和２)年３月に出生地の大野上尋常小学校を卒業している[63]。それ以後久連国民高等学校入学までの経歴は定かでないが，恐らく自家の農業に従事していたものと思われる。そうしたなかで遥か久連に遊学したのは余程の向学心と情熱に燃えていたからに外ならない。しかし，久連で得た体験と成果を実践の中で試行する間もなく戦争に駆り出された。そして敗戦と激動，彼の旺盛な研究心と実践力は活動を始めてはいたものの，本格的に彼の本領を発揮する状況はまだ整わず，なお食糧増産を中心とする急場凌ぎの域を脱していなかった。彼がかつて描いた「理想郷」を実現すべく，そしてまさに「興農・興村」の運動を組織的に展開するとという段階には至らないままに，彼はこの世を去って行ったのである。返す返すも惜しまれてならない。

---

63)　当時久連国民高等学校青年部の入学資格は高等小学校卒業程度以上となっていたことから考えて，彼は尋常小学校卒業のみで終わってはいなかったと思われる。某資料提供者は「多分広島二中（県立第二中学校）に進学したと聞いている」，と言っているが，真偽の程は確かでない。少なくとも同二中の卒業生名簿に彼の名を発見することはできなかった。或いは中途退学して久連に入学したのかも知れないとも思う。因に，尋常小学校における彼の学業成績は優秀であった。

（最後に）――この「追録」をまとめるに当たり，故伊藤　等氏ご遺族並びに親族の方々，大野町立大野東小学校並びに同西小学校，そして同町図書館から好意あるご協力を頂いたことに対し心からお礼申しあげます。

（2002年 3 月30日了）

Summary

The Line of the Folk High School Movement in Japan (7)
——Kono=Gakuen and its leaders——

Tsuyoshi Uno

K ono=Gakuen, it is the school of young men, and The starting point of the movement. That is one tipe of folk high school movement in Japan. It is a movement that based on the Christianity. There were the three leaders ——Trajiro Watase, Hirond Hirabayashi and Eiich Otani.

(1) Watase (1859～1926). He was the agriculturist , with the spirit of Sapporo Agricultural School. Kono=Gakuen was realised by his last words, he left before his own death. Those were: it will be based on Christianity, to model the Danish folk high school, and will be the farmar school to teach the practical agriculture.

(2) Hirabayashi (1886～1986). He was the researcher of Danish folk highschool. He was the first master of Kono=Gakuenon, opened the school at Shizuoka=Ken Kuzura in Oct. 1928. He was for two years, and retired suddenly the Gakuen in Nov. 1930.

(3) Otani (1905～1994). He was the agricultural student of Kyushu University until came to Kuzura. He opened Kono=Gakuen together Hirabayashi, and guided their young pupils. After the retire of Hirabayashi, he took over Gakuen master. And graduadually he developoed his original ideas and practices.

[An additional] Hitoshi Ito (1915～1964), he was hiroshima born and bred,

and educated at Kono=Gakuen in his yunger days only for three months.　After return from Kono=Gakuen, how he lived his life ?